科研費研究成果報告書

「基盤研究(C)(2)」

『複合動詞における内部構造の変遷に関する歴史的研究』

研究代表者：伊原大策

所属機関：筑波大学現代語・現代文化学系　助教授

研究課題：複合動詞における内部構造の変遷に関する歴史的研究

研究期間：平成11年４月～平成12年３月

研究組織：伊原大策　筑波大学現代語・現代文化学系　助教授

目次

1,研究の目的・経過・成果……3

1.1　研究目的と研究経過

1.2　研究成果

2,「得罪」について……5

1.1　問題の所在

2.1　古漢語（文言）における“得罪”

2.2　明代白話における“得罪”

2.3　清代白話における“得罪”

3.1　外部に賓語を従える動賓構造動詞

3.2　「動賓構造動詞＋賓語」の成立を支える合文法性

3.3　「得罪＋N」句型の普遍性

4.1　明代南方方言と現代南方方言

5.1　まとめ

3,「担心」が賓語をとるに至るまで……23

1.　“担心”の問題点

2.1　“担心”の表記

2.2　“担心”の発生

3.1　“担心”と賓語

3.2　“担心”と介詞

3.3　動作の対象を示す際の語法形式

4.1　現代語の“担心”

4.2　動作の対象を示す語法形式の変遷

5.　まとめ

4,二つ「耽心（担心）」……33

1.　はじめに

2.1　“耽心”と“担心”

2.2　白話の“耽心”の発生

2.3　文言の“耽心”の用法

3.1　白話の“耽”の機能上の特質

3.2　快楽にふける“耽”と苦痛に悩む“耽”

4.1　“耽”の語義の変化

4.2　“耽”の用法における《西遊記》の特異性と“耽心”の語構造

5,「『小心』に見られる原因賓語生成の一類型」（概要）……46

1　「小心＋N」の問題点

2　近世白話の「小心」

3　原因賓語「小心＋N」成立に関するまとめ

6,「『V見』型動詞の語構造について」……49

1　「夢見」の語構造について

1.1　“梦见”の問題点

2.1　上古漢語の“梦见”

2.2　上古漢語の“梦”

2.3　上古漢語の“梦见”の語構造

3.1　近世漢語の“梦见”の語構造

3.2　“梦见”の語構造の変質

4.1　まとめ

2　「看見」の語構造の歴史的変遷（要旨）

1,研究の目的・経過・成果

1.1　研究目的と研究経過

中国語における複合動詞は、その内部構造について見た場合、動賓構造動詞や同義複合構造動詞を始めとして数種類に分類することができる。それぞれの内部構造を持つ複合動詞は、当然ながらその内部構造に相応しい文法的特性を持つ。そのため、たとえば動賓構造動詞は内部に賓語を内包する以上、外部に賓語をさらに従えることはできない。とは言え、一部の動詞はこうした原則から外れ、外部に賓語を従える。しかしこうした動詞はしばしば現代漢語に認められるため、現代漢語が外国の言語・文化と接触した結果生じた語法であると考えられがちである。ところが極めて古い歴史を持つ語であるにもかかわらず、この特性を示す動詞が少なからず存在する。そのため、こうした特性の由来を、外国語の影響にのみ求めることは不合理である。

従来、複合動詞の内部構造が変化する動きについて注目されることはあっても、それは非動賓構造から動賓構造へと変化するもののみに目が向けられ、その変化を促すものは、圧倒的多数を占める動賓構造動詞による「類推作用」であると推測されてきた。しかしながら、動賓構造を持つにもかかわらずさらに外部に賓語を伴う動詞が古くから存在するからには、単なる類推による動賓構造化への傾向という考えでは済まされない力が機能していると考えなければならない。ここには、動賓構造化という流れとは質を異にする反対方向への変化を促すものが潜んでいると言える。

そこで本研究は、明代以降の白話を主対象にしながら、時には先秦時代の文言にまで遡り、複合動詞の内部構造の変遷過程を、歴史的観点から明らかにしようとする。この研究を通じて、本研究が明らかにし得たものは、「得罪」「担心」「小心」「看見」などの動詞の内部構造の変遷に関する知見である。すなわち、

①動賓構造を内包する動詞が非動賓構造動詞であるかのように、外部にさらに賓語を伴う文言由来の例…「得罪」

②上記と同様の特性を持つが、歴史的には比較的新しいと考えられる例…「担心」

③上記と同様の特性を持つが、賓語がウケテの関係ではなく、原因の関係を示す例…「小心」

本研究は以上の３動詞を主なる例に挙げ、複合動詞の機能に変化を促す力と、それが作用する過程を明らかにした。ここで得られた知見は、今後、現代漢語における動詞の内部構造の類型分類を試みる際、重要な視点を提供することとなるはずである。

なお、本研究では、上記の視点をさらに拡大し、動賓構造を持つ動詞以外に、さらに結果補語構造を内包する動詞についても、検討・考察を行なった。

④本来は偏正構造または同義複合構造動詞であったものが結果補語構造へと変質した例…「夢見」「看見」

1.2　研究成果

伊原大策1999　「二つの“耽心”」　東北大学『東北大学中国語学文学論集』4

伊原大策1999　「『担心』が賓語をとるに至るまで」　《筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書平成10年度》PARTII

伊原大策2000　「動賓構造動詞がさらに賓語を従える際の一類型」　汲古書院『中国文人の思考と表現』

伊原大策2001　「『夢見』の『見』は何を『見る』」　《筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書平成12年度》PARTII

伊原大策2001　「『小心』に見られる原因賓語生成の一類型」　発表予定（『中国文化』59）

伊原大策2001　「結果補語構造『V見』の発生とその変遷」　発表予定

なお、以下の各章は、上記既発表論文をまとめたものであり、また上記未発表論文の梗概または要旨である。

2,動賓構造動詞がさらに賓語を従える際の一類型

1.1　問題の所在

漢語では、授与動詞を除けば、一つの動詞は一つの賓語しかとれないという単純で拘束力の強い規則がある。この規則は、密接な内部構造を持つ一語化した動賓構造動詞にも適用される。そのため、教学の場でしばしば強調されるように、“帮忙我”は、“帮”について見た場合、賓語相当語を二つ従えるという点で誤りとなる。時に、この規則に背く例を見い出すことができても、しばしばそれらは極めて新しい時代に成立したものであるか、語そのものは古い由来を持つものであっても、その用法の普及は相当に新しい。

ところがそうした動詞とは異なり、古い歴史を持つにもかかわらず、賓語を伴う動賓構造動詞がいくつか存在する。その中で使用頻度の高いものの一つは“得罪”であろう。形態のみに基づいて判断すれば、この語は明らかに動賓構造を内包する動詞であるが、「得罪＋N（名詞）」の形式を採用して後ろに賓語を従えることができる。例えば、

1,這次可真得罪了他了。（今度はまったく彼に悪いことをしてしまった）（《中日大辞典》）

外見から判断する限り、この例では“罪”と“他”の二語が“得”の賓語相当語になっている。動賓構造動詞の原理から言えば、“得罪”は“得他的罪”のごとく離合詞の姿を呈すべきである。ところが、そうした形態は歴史的に存在したことがなく、逆に“得罪他”という非文法的なはずの表現が正しいものとして受け入れられている。

離合詞として分離可能な動詞が存在する一方で、なぜ分離不可能な動賓構造動詞が存在するのであろうか。これまで動賓構造動詞について触れられる際、離合詞にばかり目が向けられ、分離しない動賓構造動詞が研究対象として扱われることはほとんどなかった。しかし内部構造が動賓構造である以上、分離するのは当然であり、したがって分離可能な動賓構造よりも、分離不可能な動賓構造こそが注目されるべきではなかろうか。

小論は以上の疑問点より出発し、離合詞との関連を念頭に置きながら、語彙・語法

史的な観点から“得罪”及びそれと同類のいくつかの動賓構造動詞の変遷を跡づける。それによって、語の変遷過程に見られる語法上の変質に注目し、ある種の動賓構造動詞がさらに賓語を従える際の類型的な語法現象について探ることを試みる。小論の目的は、

①“得罪”は、どのような背景により、（外部の）賓語を従えるようになったのか。

②この一見特異な現象を支える語法は、どの程度の普遍性を持つのか。

③これまで例外的適用と考えられてきた表現には、実は語法的合理性が潜んでいるのではないか。

の三点を明らかにすることである。この検討を行なうことにより、“生気我”という非文法的と見なされる表現すらも、合文法的な原理に支えられて成立し得ることを示そうとする。

2.1 古漢語（文言）における“得罪”

“得罪”という語の歴史について、その形態に着目して追跡するのであれば、容易に紀元前後にまで遡ることができる。但し小論では、白話の“得罪”の変遷を考察する点に重点があるので、古漢語の“得罪”についてはその用法の特徴を概観するにとどめる。

2,孔子年三十五、而季平子与郈昭伯以斗鶏故得罪魯昭公。（《史記》47〈孔子世家〉）（孔子が35歳の時、季平子は郈昭伯と闘鶏をしたことがもとで魯の昭公に罪を得ることとなった）

このように、「得罪＋N」の句型は古漢語に既に登場する。しかし古漢語における“得罪”は、文字どおり「罪を得る」ことを指し、現代漢語の“得罪”が持つ意味より重い。同時に古漢語では「得罪＋N」の他に、「得罪＋於＋N」の句型が存在する点も現代漢語と異なる。

3,今人皆処天下而事天、得罪於天、将無所以避逃之者矣。（《墨子》28〈天志〉下）

（今、人はみな天下に居て天に仕えているのだから、罪を天に得たならば、それから逃れるすべはないであろう）

今、工具書を頼りに「得罪＋N」型と「得罪＋於＋N」型の使用状況を計数すると[1]、《十三経》全体で前者が2例であるのに対して後者は17例存在する。

以上に基づき、古漢語の“得罪”の用法の特徴をまとめると、

①意味的には、自分より上位の恐れ多い対象に「罪を得る」ことを指す。たとえ具体的に罪を科せられることはなくとも、「重大な罪により相手の怒りをかう」または「御意に逆らう」という語義を持つ。

②形態的には、「得罪＋N」型と「得罪＋於＋N」型の二型が存在するが、《十三経》を対象にした調査では、後者の方が優勢である。

魏1993は[2]、古漢語において“於”が使用されるか否かは、音節数に基づくリズムの問題と深い関係があるとする。氏が得たこの結論は先行研究が示す見解とも一致する[3]。したがって、時代もしくは作品を限定すれば、“於”が用いられるかどうかは修辞の問題であり、本質的な差違でないと考えてよい。そこで、古漢語の“得罪”の用法の特徴として、もう一項付け加えることができる。

③時代または作品を一定範囲内に限定して見た場合、“於”が使用されるか否かは単なる修辞上の条件によって決定される。

2.2 明代白話における“得罪”

さて、今度は、明代白話小説における“得罪”の用法を観察することにする。明代の白話小説では「得罪＋N」型と「得罪＋於＋N」型の二型が共に使用されるが、作品を問わず、「得罪＋N」型が目立つ。そこで“於”の有無にどのような用法上の差違が存在するかを確認するために、同一（または類似）の語に対する“得罪”の使用状況を調査する。

4,護今得罪天下、乃無地可容之犯臣。（《封神演義》3）（私は今、天下に罪を得てしまったので、許されることのない悪臣です）

4',我寧可得罪於祖宗，怎肯得罪於天下，為万世人民切歯。（《封神演義》29）

（私は祖先に罪を得ようとも、どうして天下に罪を得て、万世の人々に憎まれるようになることができましょうか）

5,軽棄国本、不顧嗣胤、忘祖絶宗、得罪宗社。（《封神演義》95）（国の基礎を軽んじ、跡継ぎを顧みず、祖先をないがしろにして国家に罪を得ました）

5',怎肯認此大逆之事、貽羞於父母、得罪於宗社。（《封神演義》7）（どうしてこんな大逆不道なことをして国家に罪を得ることができましょうか）

6,東坡因叙出去年相府錯題了菊花詩，得罪荊公之事。（《警世通言》3）（東坡は、去年宰相府で菊の詩を読み違えたため、荊公に罪を得たことを話した）

6',想当時因得罪於荊公、自取其咎。（《警世通言》3）（あの頃荊公に罪を得たため自ら咎めを受けたことを思い出した）

これらの例に基づけば、「得罪＋N」型と「得罪＋於＋N」型との間に本質的差違を見い出しがたい。とりわけ例文6と6'とを比較すれば、当時の白話における“於”の有無は、古漢語におけるのと同様に、修辞上の理由に基づくに過ぎないと推測できる。例文6では、N（名詞）以下が四音節（荊公之事）にも達するため“於”を省いたと見ることができるからである。

また次の例からも、「得罪＋於＋N」が持つ修辞上の特性を読み取ることができる。

7,（白話文体の中で）“…（省略）…只可惜袁尚宝妄言誤我，致得罪於足下，以此無顔。”（《初刻拍案驚奇》21）（「…ただ惜しむらくは袁尚宝なる占師の妄言が拙者を誤らせしこと。その故に貴殿に罪を得、かくて会わす顔もなし」）

ここには知識人の口ぶりが描写されている。この作品の編者は読書人の言葉を書き分けることにより、登場人物の個性を描き出そうとしたのであろう。文言に多い「得罪＋於＋N」がここで採用されているのは、編者の創作意識による選択の結果であると考えられる。

“得罪”によって示される対象について見ても、自分より上位の対象ではない場合が少なくない。例えば、

8,尤辰本不肯担這干紀、只為不敢得罪於顔俊、勉強応承。（《醒世恒言》7）（尤辰はもともとこの責任を負いたくないのだが、ただ顔俊の機嫌を損ねることを恐れてしぶしぶ承知した）

顔俊という人物は、話し手にとって、金銭的な有力者ではあるが単なる遠縁の若者

に過ぎない。ここでは、“得罪”の対象として身分的にほとんど差のない相手（輩行の点では下）が選ばれている。この点で古漢語の“得罪”の用法とは異なる。“得罪”のこうした用法は、賓語を伴わずに用いられると、軽い詫びを入れる際の挨拶語としても機能する。

9,鍾明収起銀子，便道：“得罪，得罪。（《喩世明言》21）（〔博打に勝った鍾明が負けた男に対して〕金を受け取りながら「いやあ悪いね、悪いね」）

このように明代白話では既に、古漢語の「恐れ多い相手の怒りをかう」という語義が失われつつあった。したがって明代白話の“得罪”の特徴として、以下のように言うことができる。

①意味的には、相手が自分より上位の「恐れ多い対象」とは限らず、「重大な罪により相手の怒りをかう」という重い語義を持たない例が目立つ。

②形態的には、「得罪＋N」型と「得罪＋於＋N」型の二型が存在するものの、前者の数が古漢語より増えている（用例数については次章の表を参照）。

③“於”が使用されるかどうかは単なる修辞上の条件によって決定される。

明代白話の“得罪”は、古漢語のそれと基本的に似ているものの、些か異なった姿で受け継がれていることが知られる。

2.3 清代白話における“得罪”

清代に入ると、明代白話に認められた①及び②の傾向はいよいよ明確なものになる。とりわけ②については、「得罪＋N」型増加の傾向が極点に達する。

今、明代及び清代の作品をいくつか選んで、“於”の有無を調べ、古漢語の用法とあわせて表にまとめると以下のようになる。

表2.3 「得罪＋於＋N」と「得罪＋N」の分布

作　品	得罪＋於＋N	得罪＋N	百分率(前者／後者)
《十三経》	17例	2例	11%
《三宝太監西洋記》	3	3	50

《封神演義》	22	10	31
《儒林外史》	0	10	100
《品花宝鑑》	0	12	100

明代以前の白話作品では「得罪＋於＋N」型と「得罪＋N」型とが共に用いられているにもかかわらず、清代白話作品では「得罪＋於＋N」型がもはや用いられない。同時に補語構造が構成される時、“得罪”の後ろに補語成分の位置する例が見い出せる。例えば、

10,却是得罪的緊。（《儒林外史》4）（〔主人が客に対して〕「ずいぶんと失礼致しました」）

11,你只在這裡鬧也罷了，怎麼連你媽也都得罪起来？（《紅楼夢》59）（あなたはここで騒ぐだけならまだしも、どうしておかあさんの機嫌まで損ねてしまうのですか）

これらの例は、“得罪”が分離困難な一語として振る舞っていることを示している。古漢語の“得罪”が連語ではなく単語であったと認定するにはためらいを伴うが、ここに示した“得罪”は意味の点でもはや「罪を得る」ではなく、構造の点でも分離されないため、既に単語としての資格を備えていると断言できる。古漢語に起源を持ちつつ発展した“得罪”は、白話文体の中でしだいにその用法を変え、清代に至って古漢語の“得罪”とは大きく異なる姿を確立するに至った。

そこで、清代白話の“得罪”の特徴について、以下のようにまとめることができる。

①意味的には、相手として、自分と同等の地位のものがしばしば選ばれ、「相手の気分を害する」という語義を持つ。

②形態的には、“得罪”の後ろに“於”が使用されることはない[4]。

③構造的には、“得罪”は密接な内部構造を持つ一語となっている。

これはとりもなおさず現代の“得罪”の用法である。現代漢語に直接繋がる“得罪”がここに誕生したと言えよう。

現代漢語の“得罪”がこうして成立したからには、“得罪”がさらに賓語を従える理由は、“得罪”の変遷過程に潜んでいることは明らかである。つまり、現代漢語で“得罪他”という表現が行なわれるのは、文言が口語化する過程で、「得罪＋於＋N」の“於”が脱落したためである。したがって、現代漢語の動賓構造動詞“得罪”が外

部に賓語を伴うという矛盾は、見せかけの文法違反に過ぎない。答えは極めて単純なのである。

以上に述べた事実がこれまで取りあげられたことがないのは、あまりに単純なゆえに、優れた先学にとってあらためて触れるまでもなかったせいかもしれない。そのため、上述の指摘自体はさほど大きな意味を持たない。ここで問題とすべきは以下の三点である。

①漢語全体において、こうした語法がどの程度に普遍的なものであるか。

②他の動賓構造動詞が外部に賓語を従える現象を発生させた際、この語法がどのように機能したか。

③その変遷を促す原理的な力は何か。

3.1　外部に賓語を従える動賓構造動詞

そこで、語法史上確認できる類似の現象について検討するため、再び明代まで遡り、そうした動きを見せる動詞の用例を調べてみることにする。

例えば“注意”や“留心”は明らかに動賓構造を内包する語であるが、この語には二通りの用法が存在する。先に“注意”について見ると、

12,好個小娘子，好生注意官人，可惜錯過了。（《初刻拍案驚奇》29）（あの娘ったら、ずいぶんとあなた様に気を向けていたんですが、惜しいことに〔あなた様はあの娘を手に入れる〕チャンスを逃しましたよ）

12',太監就丟了囲珠，単説繞翠，徽宗聴了，注意在一辺。（《十二楼》〈鶴帰楼〉1）（宦官が囲珠さんのことは放っておいて繞翠さんのことだけを言うと、徽宗は聞いて一方に〔繞翠さんに〕気を向けた）

“留心”も同様に、

13,前日我見你登科録上有名，便已為你留心此事。（《二刻拍案驚奇》11）（先日私はあなたの名前が合格者名簿に載っているのを見たので、そこでこのこと〔縁談〕を気にかけていたのです）

13',挑逗邑考，欲効於飛，縦淫敗度，何嘗留心於琴。（《封神演義》19）（伯邑考を誘惑し男女の関係を結んで淫らな行為にふけろうとしていたので、どうして琴のことを気にかけただろうか）

このように、“注意”や“留心”にも“於”（または“於”の口語形としての“在”）を伴う型と伴わない型が確認できる。このことから、“得罪”と同じ変遷を示した動詞は実は数少ないものではなく、一つの語法範疇として、古くから特定のグループを形成していたと推測できる。つまり、この種の動詞の存在の普遍性は高いと考えられる。したがって“得罪”が賓語を従える語法をこの観点から見直した場合、“得罪他”という二重賓語構造は、“得罪”にのみ認められる個別の現象ではなく、古い由来を持つ普遍的な語法原理に基づいて成立したものであると言える。

こうした一群の動詞は、清末から民国時代を経て現代に至っても引き続き一定の勢力を保っていると観察できる。その例として“満意”及び“同情”という動詞の変遷を指摘することができよう。

先ず“満意”について見ると、代表的な明清白話小説を調査の対象にする限り、この語が賓語（「満足する」という行為の対象を明示する動詞の後置成分）を従える例を見い出すことはできない。ところが清末にはこの語の使い方に変化が生じ始める。“満意”の後ろに“於”を置き、さらに名詞を伴う用法が現われるのである。

14,舒太太得信，大為失望，不免背後就有不満意於他的話，説他…。（《官場現形記》28）（舒奥さんは手紙を受け取るとひどく失望し、かげで彼に不満な言葉がないわけにはいかず、彼を咎めて言った…）

15,畢竟他的架子太大了，不満意於人的地方很多。（《官場現形記》34）（結局彼があまりに威張った様子をするので、彼に対する不満な部分がたくさんあった）

ところがそれから間もなくして民国時代に入ると、いわゆる賓語を明確に従える用法が出現する。

16,不過他愛花銭，又喜歓打扮自己，因此他們不大満意他。（巴金《電》7）（しかし彼は金遣いが荒くおしゃれ好きなので、彼らは彼にあまり満足しなかった）

17,六宝還是不很満意黄道士的回答，但也不再追問，只扁起了嘴唇摇頭。（茅盾《残冬》2）（六宝は黄道士の返事にあまり満足しなかったが、それ以上尋ねもせずに、ただ口を一文字に結んで首を横に振った）

ここではもはや“於”は使用されない。現代漢語の“満意”がここに成立したと言える。

“満意”と同じように“同情”にも類似の歴史が存在する。“同情”は文言に由来する歴史の古い語であり、それが旧白話に受け継がれた上で、現代漢語で常用される動詞となっている。しかしその本来の用法は現代漢語のものとは大きく異なる。明代白話作品から例を挙げると、

18,此貪彼愛不同情，你酔我醒皆妙境。（《二刻拍案驚奇》38）（〔男女間で〕一方が金を求め一方は肉欲を求めて心は同じではない。一方が酔って一方が醒めているけれど、いずれも結構な心持ちである）

19,郎君之勇，雖昔日卞荘、李存孝不是過也。但好生悪殺，万物同情。（《醒世恒言》5）（あなたの勇ましさは昔の卞荘子や李存孝さえも及びません。しかし生きることを好み、殺すことを憎むのは全ての生き物の共通の気持ちです）

このように、旧白話の“同情”には「心を同じくする」「共通の心を持つ」などの意を示す用法がある。しかし現代漢語で常用する「他人の立場や心理に対して共鳴する」という用法は、明清以前の作品に見当たらない。こうした意味で用いられる用法の発生は相当に遅れるのである。現代漢語の“同情”は、おそらく英語の「sympathize」の訳語として新しい時代に発生したものであろう[5]。

“同情”が「sympathize」の意を持つ動詞として使用される以上、行為の対象を示す語を従えることが求められる。ところが“同情”の後ろに賓語を置こうとすると、たちまち文法上の矛盾に突き当たる。この語が動賓構造を内包しているため、動賓構造内部の賓語と外部の賓語とが撞着を起こすからである。その結果、“同情”の新用法が漢語に定着するには試行錯誤の時期を経なければならなかった。

すなわち、魯迅は“同情”を使用する際、対象を示す語との間に“於”を使用する。

20,而況兼做教員的方玄綽，自然更表同情於学界起来，所以…。（魯迅《吶喊》〈端午節〉）（ましてや教師を兼業する方玄綽は、もちろん教育界に同情をよせたため…）

21,他既已表同情於教員的索薪，自然也賛成同寮的索俸，然而…。（魯迅《吶喊》〈端午節〉）（彼は教師の給料支払要求に同情をよせたからには、もちろん同僚の給

料支払い要求にも賛成したが、しかし…)

ここに、動賓構造動詞“同情”がさらに賓語を従える不自然さを回避しようとした工夫の痕跡を認めることができよう。しかし、魯迅のこうした工夫は必ずしも同時代の作家の賛成を得たわけではなかった。

22,她想起他過去的事情，她同情他，又為他耽心。（巴金《雨》12）（彼女は彼の過去のことを思い出し、彼女は彼に同情し、彼のことを心配した）

23,“她是値得怜憫的，値得同情的，而且還値得愛的”“是的，我応該同情她…”（巴金《雨》6）（「彼女は憐れみに値し同情にも値し、愛することにも値する」「そうだ私は彼女に同情すべきだ」）

このように巴金は賓語を動詞の直後に置き、「同情＋N」型を採用する。ここではもはや“於”は求められていない。意識したか否かは別にして、巴金は、「得罪＋於＋N」から「得罪＋N」が生じる語法をここで応用したのである。“満意”が賓語を従える際に“於”を要求しない巴金にとっては、“同情”に“於”を使用するのは迂遠な作業でしかなかったであろう。この後、語法的には「正しい」はずの魯迅の工夫は引き継がれることなく、「誤った」はずの巴金の表現が受け入れられ、現在の標準的な用法を形成することとなった。

実は清代後半から民国初期にかけては、それまで賓語を取ることのなかった動詞が賓語を求めて他動詞化する傾向が顕著な時期に相当しており[6]、“満意”や“同情”もそうした環境の中で賓語を従えることを求めたものと考えられる。

この時、これらの語がその要求を実現するために選んだ方法は、“得罪”が外部に賓語を従える原理を採用することであった。新しい賓語と動詞との間に“於”を挟む形態を変遷の一過程として想定しさえすれば、動賓構造がさらに賓語を従えるという文法的矛盾はたちどころに解決できるからである。《官場現形記》の“満意於他”や魯迅の“同情於教員的索薪”は、正にその一過程が語法史的に実践されたことを物語る。したがって、「満意＋N」及び「同情＋N」という新用法の成立を促したものは、まぎれもなく「得罪＋於＋N」から「得罪＋N」を生み出した語法の力であり、ただ“得罪”が一千数百年以上の時間をかけて実現した過程を、“満意”や“同情”はわずかその百分の一の時間で完了した点が異なるに過ぎない。この事実は、“於”の脱

落による二重賓語構造の原理が、新語や新用法の発生にも強く関与することが可能であることを明示している。

3.2 「動賓構造動詞＋賓語」の成立を支える合文法性

では、新語や新用法の成立にあたって、「得罪＋N」の語法はどのような語に対してどのように機能するのであろうか。この問題を検討するため、以上で扱った動賓構造動詞が共通して持つ特徴を観察してみることにする。

既に見たように、「得罪＋N」は、本来動詞に内包される賓語相当語（“罪”）とその後ろに続く動詞外部の賓語相当語（N）との間に“於”の介在を想定することによって、一つの動詞が二つの賓語を従えるという矛盾を解決するわけであるから、その文法的特徴について見た場合、必然的に一定の制限が存在することになる。すなわち、「得罪＋N」を成立させる原理が適用可能な動詞とは、

①動賓構造が固定化し、その結果、動詞とそこに内包される賓語が密接に結びついて一語化していること。

②脱落する“於”が文言系の虚詞であるため、動詞も文言由来のもの、または文言の匂いを持つものであること。

そしてより重要なのは、

③動詞に内包される賓語がaccusative（対格）であり、動詞の外部に位置する賓語がdative（与格）或いはlocative（位置格）であること。

つまり「得罪＋N」型動詞に認められる共通性とは、文言系動詞によるA格（accusative）とD格（dative或いはlocative）の分業に基づく二重賓語構造である。“得罪”はA格とD格の分業によって二つの賓語を従えていると言える。

もともと古漢語に既に“於”の脱落現象が認められる以上、A格とD格の分業による二重賓語構造は漢語本来の語法として、見えないところで絶えず機能してきたと考えられる。とすれば、“得罪”がさらに賓語を従える現象は、文言から口語へと変化する際に生じた特異な現象ではなく、漢語語法の本質に根ざしたものだと言うべきである。

3.3　「得罪＋N」句型の普遍性

このように、A格とD格の分業に基づく二重賓語構造が漢語本来の語法であるからには、その原理が適用可能な一群の動詞に対して、その語法は普遍的な影響力を持ち得ることが期待できる。上で扱った“満意”や“同情”が、清末から民国初期という極めて短い期間に賓語を取るようになったのも、この普遍性の強さを示すものに他ならない。

事実、この語法は、“於”を伴う用法が歴史的にかつて存在しなかった語に対しても広く影響力を発揮していると考えられる。例えばその例として、現代漢語から“出席”をあげることができる[7]。

24,請校長出席大会。（校長に大会へ出席するようお願いする）

この例では、動賓構造を内包する動詞“出席”がさらに外部に“大会”という賓語を従えている。その点では、これは明らかに語法的矛盾を伴った表現と言うべきであろう。しかし実は、非文法的と思えるこの構造を支える合文法性が存在する。それは、隠された“於”が効果的に演出する機能である。つまり、この例は、A格とD格の分業に基づく二重賓語構造の一つであると見なすことができる。すなわち、

24',出席（於）大会＝席ヲ大会ニ出す

動詞と賓語との関係を論じる際、例文24は文法違反であるにもかかわらず慣用的に成立する例としてしばしば紹介されてきた。しかし、この例文が成立するのは、暗黙のうちに隠された“於”が効果的に機能しているからである。言うまでもなく、“於”は本来文言で常用される虚詞であるため、文言由来の動詞、または文言の匂いのする動詞に対して、この語法はとりわけ強く機能することが予想される。その点で、“出席”はこの語法の適用を受けるにふさわしい動詞と言える。とすれば、“出席”がさらに賓語を従えるのは見事なまでに合文法的な用法であり、こうした用例を慣用的な例外と見なすのは、小論が上に申し述べた点を見落とした結果としての単純な誤解である。

類似の例は明代白話からも見い出すことが可能である。ここでは“動火”という動

詞を取りあげたい。この語は内部構造から見て明らかに動賓構造を持ち、したがって離合詞として分離する。

25,又有一等痴心子弟，明暁得小娘心腸不対他，偏要娶他回去，拚着一主大銭，動了媽児的火。（《醒世恒言》3）（また馬鹿な嫖客がいて、お女郎さんが自分を好きでないのを知りながら、どうしても請け出したいというので大金をはたいて遣り手婆の欲心をかきたてた）

ところがこの動詞は後ろにさらに賓語を従えることがある。例えば、

26,你動火我的徒弟麼？（《初刻拍案驚奇》26）（あなたは私の弟子に対して欲情が生じましたか）

27,奶子動火他這些東西。（《初刻拍案驚奇》36）（乳母は彼女のこれら〔金銀宝石〕に欲望が湧いた）

これらの例では、動賓構造動詞“動火”が“徒弟”や“東西”という賓語をその後ろに伴っている。一般に、動賓構造動詞が一語化して外部に賓語を従える現象は、明代白話には容易に観察できない。そのため、《拍案驚奇》に存在するこうした用法は、明代作品としては相当に特異なものであると見るべきである。

こうした、言わばあり得ないはずの「文法違反」の例が《拍案驚奇》に集中して見い出されるため、テキスト自体に問題があるとも考えがちである。しかし信頼できる版本に複数（5例）の用例が現われる以上、作品の編者の言語にこうした語法が存在したと考えねばならない。

そこでこれらの例を注意深く観察すれば、興味深いことに気づく。それは「得罪＋於＋N」の“於”が脱落した原理がここにも隠れているという事実である。

26',動火（於）我的徒弟＝火〔欲望の炎〕ヲ我が徒弟ニ動かす

すなわち、テキストの信頼性に疑いすら抱かせるこうした破格の表現は、A格とD格との分業による二重賓語構造によって成立しているものと考えられる。“動火”がさらに賓語を従える例を普遍的に見い出すことが困難なのは、この語が文言系の動詞ではないため、“得罪”が辿ったのと同じ語法の適用を受けにくかった結果に過ぎないであろう。また、賓語を従える“動火”の例が、《拍案驚奇》に集中して現れるの

は、編者の方言と関係があるものと推測できる。次の章で触れるように、下江官話系作品である《拍案驚奇》に“動火＋N”が現われるのは、おそらく偶然でない。

4.1　明代南方方言と現代南方方言

ところで現代漢語に目を向けると、一部地域で行なわれている方言の中には、語法的に興味深い現象を少なからず見い出すことができる。例えば台湾式北京語（国語）では、

28,你在生什麼気？（あなたは何を怒っているの）

28',你在生気什麼？（あなたは何を怒っているの）

台湾式北京語では例文28'も許容度が極めて高い[8]。実はこの語の非離合詞用法を持つのは、台湾という特殊な環境における漢語のみではない。現代中国文学の著名な作家の作品中にも、同様の例を見い出すことができる。

29,我并且生気我自己：怎麼我只会那様拘束，不調皮的在応対？（《莎菲女士的日記》〈一月一号〉）（私はさらに自分自身に怒った。どうして自分はあんなふうにこだわるばかりで、茶目っ気を出して対応していないのかと）

30,他倆不生気我的嘲笑，他倆還驕傲着他們的純潔，而笑我小孩子気呢。（《莎菲女士的日記》〈一月十二〉（彼ら二人は私が嘲笑したことを怒ろうとしないどころか、自分達の純潔を誇りに感じ、私の子供じみた様子を笑いもする）[9]

これまで離合詞が話題になる時、典型的な例として“洗澡”“幇忙”“生気”がしばしば取りあげられてきた。これらは動賓構造を内包するから「洗澡＋N」「幇忙＋N」「生気＋N」という表現はあり得ないと言うのである。しかし“洗澡身子”は15世紀の文献にその姿を確認できるし[10]、“幇忙朋友”は老舎作品にすら見い出すことができ[11]、「生気＋N」は丁玲作品に現に存在するのである。こうした例を、単に過去の誤用として等閑視することは適切でない。複数のネィティブに共通して「誤用」が発生する以上、合理的な文法がその成立を背後で保障しているはずだからである。

似ていることを見い出すだろう。

31,動火＋（於）＋N＝火〔欲望の情念〕ヲN（名詞）ニ動かす（明代下江官話《拍案驚奇》）

32,生気＋（於）＋N＝気〔怒りの情念〕ヲN（名詞）ニ生じる（現代台湾方言及び《莎菲女士的日記》）

したがって「生気＋N」は格の分業に基づく二重賓語構造を構成していると考えられる。“動火”がかつて賓語を取る型と取らない型との間を徘徊したのと同じように、“生気”も賓語を従えるべく変身を図ったのであろう。しかし文言臭を持たない“生気”は“同情”と同じ道を歩くことはできなかったと見える。丁玲作品に現われる「生気＋N」は、その試みが失敗した後に残された僅かな痕跡である。「動火＋N」が《拍案驚奇》に集中して見い出され、「生気＋N」が台湾の言語や丁玲作品に存在するのは、動賓構造動詞を一語の他動詞に変えようとする力が、広義のいわゆる南方方言で強く機能する傾向があるためだと推測される[12]。

5.1 まとめ

小論は、“得罪他”という一見不合理な用法を持つ動詞を手がかりに、動賓構造動詞がさらに賓語を従える際の一類型について考察した。その結果、歴史的に見れば、「得罪＋N」は「得罪＋於＋N」の“於”が脱落したものであり、しかもこの句型は“於”の単なる省略の結果としての形態ではなく、A格（accusative）とD格（dative或いはlocative）の分業に基づく二重賓語構造に支えられて成立したものであることが知られた。

格の分業による二重賓語構造の原理は、目立たないながらも、適用可能な一群の動詞（または連語）に対して古漢語から明清白話を経て現代漢語に至るまで、一貫して影響力を持ち続けた。その結果、早い時代に「注意＋N」や「留心＋N」という表現を生ぜしめたのみでなく、清末から民国初期にかけて、それまで賓語を取ることができなかった“満意”“同情”に対しても、「満意＋於＋N」「同情＋於＋N」を介在させながら「満意＋N」「同情＋N」という語法の発生を促した。意味的には自動詞

の如く振る舞う用法しか持たなかった“満意”や“同情”は、こうしてその機能を他動詞化させることに成功した。この原理は、密接に結び付いた内部構造を持つにもかかわらず、なお賓語を取ることに躊躇している一群の動詞（A格とD格の分業による二重賓語が応用可能な動詞群）に対して有効な合理化の手段を与えることになったと見られる。

語構造の研究において、非動賓構造の動賓構造化のみがしばしば指摘される傾向があるが、実は動賓構造の非動賓構造化という反対方向の現象は、現代漢語の成立を考える上で見過ごすことのできない流れである。そうした観点からこの問題をあらためて見直せば、動賓構造を非動賓構造化する過程は、自動詞を他動詞化しつつ漢語を豊かにする過程でもあり、そこにはいくつかのパターンが存在することが知られる。そのパターンの一つが、小論で明らかにした格の分業による二重賓語構造に基づく他動詞化の例である。このパターンで作用する力は、“動火”や“生気”さえをも一語の他動詞に変えようとする力を持つ。ここにこの語法の影響力の強さと応用範囲の広さを認めることができよう。

ところで極めて最近に至って、“得罪”に新しい変化の兆候が生じつつある事実を窺うことができる。すなわち“得他的罪”の出現である。現在のところ、この用法は一般的であるとは言いがたいが、一部で報告されている[13]。この新用法の出現は、大勢力を占める動賓構造動詞の圧力の下で、“得罪”が離合詞化に向けて第一歩を踏み出し始めたことを示している。これは清代前期以来約三百年ぶりに生じた“得罪”の大きな変化であると同時に、二千年にわたる伝統的な姿を失う一過程でもある。“得罪”の今後の成長を見守りたい。

注

1）李波・李暁光・富金壁1997に拠った。

2）魏培泉教授には“於”の用法についての他、後に述べる“動火”についても貴重な　教示を賜わった。感謝申し上げる。

3）例えば楊・何1992、p832。

4）清代以降の作品から「得罪＋於＋N」型が完全に消えたわけではない。白話作品

内　であっても、擬古的な文体ではなお“於”を伴う句型が採用される。例えば《三侠　五義》第18回“豈不得罪於天下乎”。

5）沈1994、p134、p149の指摘によると、メドハーストの《英漢辞典》（1847年）及び　ロブシャイドの《英華辞典》（1866年）に“同情”が「Sympathetic(ize)」の訳語　として登録されている。

6）例えば“担心”が賓語を従えるようになったのもこの時期である。拙論1999参照。

7）“出席”も近代における新語であると考えられる。沈1994、p213。

8）1997～1999年に台北の大学で行なった調査に基づけば、台湾では“你在生気什麼？　”について、有効回答者80名のうち、90%の若者が常用または許容する。

9）丁玲作品の“生気”は、大阪外国語大学が公開した「中国語学研究用テキストファイル」（1994年）を利用して見い出した。謝意を表する。

１０）拙論1998b。但し「洗澡＋N」を成立せしめる原理は「得罪＋N」とは異なる。

１１）拙論1998a。「幇忙＋N」は複数の現代文学作品に見い出されるだけではなく、現在の台湾式北京語においても常用される。但し「幇忙＋N」を成立せしめる原理　は「得罪＋N」とは異なる。

１２）南方方言に、動賓構造を一語化しようとする傾向が強く存在する事実とその背景については、別稿「南北方言と離合詞」が予定されている。

１３）例えば、香坂1982、p248や岡部1990、p237。しかし1997～1999年に北京、西寧、長沙、台北の若者350名を対象にして行なった筆者の調査に拠れば、“得他的罪”　を一般的用法であると認定することはできない。香坂1982及び岡部1990で示される　“得罪”の離合詞用法は、この語が動賓構造であることを自覚する一部知識人によ　ってなされた作為的表現としての疑いがある。

参考文献

愛知大学中日大辞典編纂処1986　《中日大辞典　増訂版》　大修館書店

伊原大策1998a　〈“幇忙你”は誤りか？〉　《言語文化論集》48

伊原大策1998b　〈“洗澡”考〉　《中国語学》245

伊原大策1999　〈“担心”が賓語をとるに至るまで〉　《筑波大学「東西言語文化

の類型論」特別プロジェクト研究報告書平成10年度》PARII
岡部謙治1990　《この中国語はなぜ誤りか》　光生館
魏培泉1993　〈古漢語介詞《於》的演変略史〉《中央研究院歴史語言研究所集刊》62
香坂順一1982　《現代中国語辞典》　光生館
沈国威1994　《近代日中語彙交流史》　笠間書院
楊伯峻・何楽士1992　《古漢語語法及其発展》　語文出版社
李波・李暁光・富金壁1997　《十三経新索引》　中国広播電視出版社

3,“担心”が賓語をとるに至るまで

1. “担心”の問題点

内部構造について見た場合、“担心”（心配する）は動賓構造を内包しているにもかかわらず、さらに賓語を従えることができるという点で特異である。もちろん、内部に動賓構造を隠し持ちつつも賓語を従えたり、あるいは分離不可能な単位として他の要素が内部に割り込むのを拒否する現象は、現代語において珍しいものではない。例えば、“动员大家”（みんなを動員する）や“失恋过”（失恋したことがある）などはその例である。単にいわゆる賓語という観点から見た場合、前者は一個の動詞が“员”と“大家”という二つの賓語を従えている点で「文法違反を犯して」いるし、後者は賓語の後ろに“过”を置く点で「誤って」いる。しかし実際の運用面においてこうした用法は、文法上の矛盾を感じさせることはない。

“动员”や“失恋”はいずれも歴史が浅く、現代に至ってようやく普及した動詞である。ところが“担心”は明代白話作品において既に使われていた語であり、少なくとも四百年の歴史を持つ。この点で“担心”は“动员”や“失恋”と大きく異なる。

このように古い歴史を持つ“担心”は、誕生当時から賓語を従えることが可能であったのだろうか。もしそうでないとしたら、いつ頃から賓語をとることができるようになったのだろうか。そもそもこの語は本来どのように使われ、どのような経過を辿った結果、現在の姿を呈するに至ったのだろうか。

小論は“担心”の歴史を遡り、動賓構造を内包する動詞が賓語をとるに至る過程を追跡することで、かつて賓語を従えることのなかった動詞が賓語を伴うようになる現象の一類型を探ろうと試みる。主な指摘として、①“担心”は少なくとも伝播の過程においては北方に偏りを示す方言であったこと、②「担心＋賓語」句型の前段階として、清代に「介詞＋名詞＋耽心」句型が存在したこと、③「介詞＋名詞＋耽心」句型の発生には、類語の“耽忧”の持つ句型が応用されたであろうこと、④「担心＋賓語」句型は民国初期においてようやく成立したこと、⑤新興の「担心＋賓語」句型は欧化語法ではなく、清末以前の漢語に準備されていた一連の傾向が生み出した現象と見なすべきであること、などを申し述べる。

2.1 “担心”の表記

“担心”は古くは“耽心”とも書かれるが、文言の“耽心”とは用法において大きく異なる。小論が扱うのは言うまでもなく白話の“耽心”である。

“耽心”内部の動詞成分“耽”は、元代白話において「肉体的・精神的にマイナスの影響を受ける」という義を持っていた。白話としての“耽心”は、元代白話の“耽”の用法に基づいて発生したものである[1]。

白話“耽心”には、類語として“耽病”“耽疮”“耽冷”“耽忧”“耽惊”“耽寂寞”などがある。これらの“耽”はいずれも“担”の表記をも合わせ持つ。現代語の“耽心”は、元代白話“耽”の本来の用法が忘れ去られた結果、専ら“担”の表記が採用されるようになったものである。

そこで小論では、“耽”と“担”を区別する必要がある場合を除いて、表記を“耽心”で統一する。しかし引用の場合はもちろん原文に従う。

2.2 “担心”の発生

“耽心”は遅くとも明代中期には既に成立していたが、典型的な南方系作品からその用例を見い出すことは困難である[2]。そのためこの語の発生と伝播には、非南方系方言が関与していると考えられる。次の例は代表的な明代白話小説に現われた“耽心”の中で、最も初期の例である。

1,你两个没了行李马匹耽心，却好生把守洞口。（《西遊記》83）（おまえら二人は心配すべき荷物と馬がなくなったのだから、よくよく洞窟の出口を守っていろ）

2,三宝老爷一向耽心的是这个软水洋。（《三宝太監西洋記》21）（三宝太監様がずっと心配なさっていたのはこの軟水海です）

3,今日却也到了南京。这五七年间好担心也。（《三宝太監西洋記》99）（今日ようやく南京に着きました。この数年というもの、随分と心配いたしました）

この後、“耽心”は典型的な北方系作品において継続的に使用される。

4,他店内房屋宽广，下的客商多，放财物不耽心。（《金瓶梅》51）（彼の宿は部屋が広く泊まりの商人も多いので、かねめのものを置いても心配はいりません）

5,如今女婿出考，甚是耽心。（《醒世姻縁伝》50）（今、娘婿が受験に出かけるのは誠に心配です）

6,不过是大家顽笑，将酒作引子。妈妈们别耽心。（《紅楼夢》62）（みんなで遊ぶのにお酒で調子をつけるだけです。婆やたちは心配しないで下さ）

《金瓶梅》→《醒世姻縁伝》→《紅楼夢》と受け継がれる流れの存在を、ここに認めることができよう。“耽心”は北方系作品によって清代まで伝えられたと言うことができる。その意味で“耽心”は北方に偏る方言である。南方系作品にこの語が常用されるようになるには、清末まで待たなくてはならない。

7,陶子尧看了，着实有点耽心事，愁眉不展，茶饭无心。（《官場現形記》9）

（陶子尧は見終わると確かに心配なことができてしまい、暗い表情で食事も進まなくなった）

8,区奉仁听了，一面替他叹息，一面又自己担心。（《官場現形記》43）（区奉仁は聞くと彼のために溜息をつきながら、自分でも心配した）

3.1 “担心”と賓語

ところで旧白話（現代口語文体が成立する以前の白話）において、“耽心”がいわゆる賓語というものを従える例は見あたらない。「心配する」という行為の対象を示す際は、介詞を応用する。例えば

9,成日把你耽心儿来看，教人气破了心肠。（《金瓶梅》59）（一日中あなたを心配して見たおかげで、心は張り裂けました）

この例は詞《山坡羊》が《金瓶梅》に引用されたものである。韻文内での使用例であるためか、他の白話（散文）に類例を見い出すことができない[3]。この後、“耽心”が介詞により行為の対象を示す用法は暫く現われない。こうした“把”の使用が一般に受け入れられるものではなかったためであろう。

やがて清代中期に至ると、ようやく“为”や“替”によって行為の対象を示す句型が用いられ始める。

10,园中姊妹一干人暗为二姐耽心。（《紅楼夢》69）（園内の姉妹たちはひそかに二姐のことを心配した）

11,但只我倒替你耽心虑后呢。（《紅楼夢》79）（しかし私はあなたのことを先々まで心配しましたよ）

これが間もなく広く行なわれるようになり、清末を経て現代語に伝えられる。

12,还有我们这个杜玉侬，我倒替他担心。（《品花宝鑑》24）（それにこの杜玉儂という人物がいて、私は彼のことを心配しています）

13,治弟为着这件事正在这里替老父台担心呢。（《官場現形記》41）（私はちょうどこのことで閣下のために心配しているところです）

14,我不会有危险。你不要替我耽心。（《愛情三部曲》〈雨〉15）（危ないことはありません。私のことは心配しないで下さい）

“耽心”は、こうして介詞によって行為の対象を示すことが可能となった。現代語“耽心”の基礎がここに成立したと言えよう。“耽心”がこの姿を示すようになるまでに、その誕生から既に少なくとも三百五十年が経過している。

3.2 “担心”と介詞

代表的な明清白話作品を調査の対象にする限り、介詞によって行為の対象を示す用法は、《紅楼夢》から始まると言える。しかし介詞を応用するという手段は必ずしも《紅楼夢》の独創というわけではない。というのは、「耽～」型の語には早くからこの用法が存在するからである。意味の上でも“耽心”と似ている“耽忧”を例にとって示すと

15,倒在那里替主人快活，替女子担忧。（《型世言》20）（そこに横たわって主人のことを喜ばしく思い、その女性のことを心配した）

16,小妮子蒙夫人抬举，故替夫人耽忧。（《醒世恒言》23）（私めは奥様のお引き立てを戴いておりますからこそ、奥様のことを心配しているのです）

このように「介詞＋名詞＋耽心」句型の成立の契機は、早くから準備されていたと言える。《紅楼夢》に現われた新用法と見えるものは、実は「替～耽忧」の賓語部分“忧”が“心”に置き換えられたものに過ぎない。

3.3　動作の対象を示す際の語法形式

今、次章で触れる民国時代の作品も含めて、“耽心”がその行為の対象（いわゆる賓語で現わされるべきもの）をどのような形式で表現するかについて、作品別に計数してみる。

“耽心”が対象を示す際の語法形式

	把+N+耽心	为+N+耽心	替+N+耽心	耽心+O
《金瓶梅》	1	0	0	0
《醒世姻縁伝》	0	0	0	0
《紅楼夢》	0	1	1	0
《官場現形記》	0	0	2	0
《愛情三部曲》	0	2	10	6

この表からわかるように、「耽心＋賓語」句型が現われるのは、民国初期の新文化運動の中で成立した《愛情三部曲》に始まる。“耽心”は古くから動作の対象を示す表現を求めながらも、語法上のいわゆる賓語として従える形態を、旧白話において全く持たなかった。これは、旧白話の“耽心”の内部構造が一語化していなかったためであろう。

《醒世姻縁伝》の次の例は、清代の“耽心”の内部構造を理解する上で参考になる。

17,我耽那心待怎么？（《醒世姻縁伝》65）（私がそんな心配をしてどうするの）

この例から、“心”は“耽心”の内部において、賓語としての独立性の高かったこ

とが知られる。現代語においても“耽着心”という分離型が姿を現わすことがあるものの、単に時態助詞によって分離する例と、賓語が修飾語（例文17では指示詞）を伴って分離する例を同じように扱うことは適切でない。というのは、非離合詞が離合詞へと変質する際、時態助詞によって分離される段階を経てから賓語が修飾語を伴うようになる先例を確認できるからである[4]。

“耽那心”という分離型が可能であった事実は、“耽”がなお独立運用可能な動詞であったことを示している。こうした用法の存在は、“耽心”という語を生み出す環境を作った“耽忧”が、清代において動詞成分と賓語成分の結びつきが弱いままであった事実と一致する。

18,你替人耽什么忧？（《紅楼夢》94）（あなたがなぜ人のことを心配するの？）

“耽忧”が分離可能な動賓連語として運用される以上、“耽心”が一語化するのは困難である。同様に、“耽心”が分離して用いられる用法が残っている間は、「耽心＋賓語」句型が成立するのは難しい。授与動詞を除いて、一つの動詞は一つの賓語しか伴うことができないという単純で強力な語法が、原則通りに機能するからである。

4.1　現代語の“担心”

ところが民国時代に入ると状況は大きく変化する。巴金の作品を例にとると

19,他这个二十几岁的人却耽心着中华民族太衰老，耽心着中国青年太脆弱。

（《愛情三部曲》〈電〉2）（この二十数歳の男は、中華民族があまりに衰弱し、中国の青年があまりに脆弱であることを心配している）

20,林替他们耽心起来。（《愛情三部曲》〈電〉7）（林は彼らのことを心配し始めた）

ここでは“耽心”はその後ろに時態助詞や方向補語を伴い、分離しない一語と化している。同時に、これまで存在したことのない用法も現われ始める。

21,他对她说，还耽心她会拒绝。（《愛情三部曲》〈雨〉7）（彼は彼女に言っては

みたものの、彼女が拒否するのではないかと心配した）

22,我相信你的一切。只是我耽心我配不上你。（《愛情三部曲》〈雨〉7）

（私はあなたの全てを信じます。しかし私は自分があなたに相応しくないことを心配するのです）

こうして“耽心”はようやく賓語を従えることが可能となった。現在の“耽心”の用法はここに成立したのである。

4.2　動作の対象を示す語法形式の変遷

民国初期に「耽心＋賓語」句型が発生した事実は、“耽心”の環境に変化が生じたことを暗示する。民国初期と言えば、中国が西欧文化の強い影響力のもとで大きな改革を迫られた時期であった。では、“耽心”が賓語を従えることを可能にしたのは、新文化運動によってもたらされた外的な条件によるものだろうか、あるいは“耽心”自身が持つ内部環境の変化によるものだろうか。

そこで、この点を明らかにするため、清末に成立した《官場現形記》の“耽”（担）の用法について、表記を区別して整理を行なう[5]。

《官場現形記》における“耽”（担）の用法

耽忧	耽惊	耽（独立した動詞用法）
0	1	3
担忧	担惊	担（独立した動詞用法）
1	2	／

《官場現形記》において、“耽”が独立した動詞として用いられる例はわずかに3例にとどまる。しかもこの3例のうち2例が「時間的に遅れる」という意味の“耽”であり、残りの1例が“耽了许多惊，受了许多怕”（第17回）である。この例は“耽惊”を分離して使用しているものの、実は古くから使用されるステレオタイプの表現である。例えば明代の例を引くと

23,总兵官和这个小番耽了许多惊，受了许多怕。（《三宝太監西洋記》74）（司令

官とこの下役人はひどく驚き、ひどく恐れもした）

これは、“耽”が独立運用可能な語法単位として扱われていた《醒世姻縁伝》の例（例文17）とは異なるものである。

“耽”が独立運用可能な語法単位として存在しない以上、“耽”はその賓語である“心”と一体化せざるを得ない。巴金の作品に“耽心着”が出現するのは、“耽”が独立した動詞としての生命力を失った結果であろう。

よく知られているように、民国初期の新文化運動は社会に新しい制度や思想をもたらしたと同時に、言語にも大きな変化を促した。新社会の新文化はしばしば西欧の影響を受けて発生したものであるため、新興語法の多くも欧化語法の一種と考えられがちである。しかしながら、“耽心”がその後ろに賓語を伴うことに成功したのは、その内部要素が一体化し、“心”がもはや賓語でなくなったためである。西欧語の文体や語法が間接的に作用したことはあったにせよ、変化の主要因は“耽心”内部に既に存在していたと言える。であるからには、「耽心＋賓語」句型の発生を、そのまま欧化語法と見なすことは適切でない。

実は、かつて賓語をとることのなかった動詞（動賓構造動詞以外を含む）が賓語を求め始める顕著な傾向は、清末以前に既に確認できる[6]。そのため“耽心”に賓語を後置するよう促した力は、“耽”が本来の用法を失った結果生じたもの以外にも、旧白話に存在していたと考えることができる。民国初期に至って誕生した「耽心＋賓語」句型は、いかにも現代的な新興語法ではあるが、それを欧化語法の一種と見ることに注意が必要であろう。

5. まとめ

以上から次のことが言える。

“耽”は「精神的に重荷を受ける」という意味を持ち、かつては単独で使用可能な動詞であった。“耽心”は、その“耽”が“心”と結び付くことによって発生した語である。

この語は遅くとも明代中期には白話作品で使用されるまでに成長していた。しかし

当時の典型的な南方系作品にこの語を見い出すことは難しく、《西遊記》の一部や《三宝太監西洋記》に初期の例を見い出すことができるに過ぎない。その後、この語は《金瓶梅》《醒世姻縁伝》を経て《紅楼夢》に受け継がれ、清代中期に至った。代表的な明清白話作品を調査の対象にする限り、“耽心”が南方系作品に現われるのは《官場現形記》まで待たなくてはならない。したがって少なくとも伝播の過程においては、“耽心”は北方に偏る方言性を持つと言える。

清代中期にはこの語に新しい用法が生まれ、清末作品へと受け継がれた。すなわち、「介詞（“替”または“为”）＋名詞＋耽心」句型がそれである。この介詞用法が生じる契機として、“耽忧”“耽惊”などの「耽～」型連語が既に持っていた用法を指摘することができる。というのは「替＋名詞＋耽忧」という表現が早くから存在していたからである。

こうして“耽心”は、介詞を使用することで行為の対象を表現することが可能となったが、清代においては、直接に賓語を後置することは、なおできなかった。明清白話では、“耽忧”“耽心”などの“耽”はなお一定の独立性を保っており、そのためこれらの連語が一単語として認識され難かったためである。“耽心”“耽忧”などが、独立した動詞“耽”に賓語を伴った動賓連語として見なされている間は、さらに賓語を後置することは困難だったのである。

ところが、民国初期に至ると新文化運動の中で、これまでと大きく異なる用法が生じ始める。巴金作品では“耽心”は密接に結び付いた内部構造を持つ一語として認識され、後ろに賓語を伴うことが可能となった。この背景には、清末には「精神的な重荷をになう」という意を持つ動詞“耽”が、既にその生命力を失っていた事実が存在する。また清末以前に既に顕著になっていた自動詞のいわゆる他動詞化の現象も、「耽心＋賓語」句型の発生を促したことであろう。こうした点を考慮すると、“耽心”が賓語を伴うようになった新興語法を、西欧語の影響を受けて成立した欧化語法の一種と見なすことに注意が払われなくてはならないと言える。

現代語の“耽心”はこうして成立した。今では“耽”の本来の意義は見失われ、おそらく文言の“耽”と意義上衝突[7]を起こすためであろう、不安定だった表記も“担心”に統一された。一語化したはずの“耽心”（担心）に、現在、時として現われる“担着心”という分離形は、長い時の流れを経て動詞“耽”（担）がわずかに残す古い姿の面影である。

注

1)元代白話“耽”の機能と白話“耽心”の発生については別稿が準備されてい る。『東北大学中国語学文学論集』4、1999（予定）。

2)ここで言う「典型的な南方系作品」というのは、《水滸伝》や《拍案驚奇》 など下江官話系作品と考えられるものを指し、《西遊記》とは区別している。 《西遊記》は江蘇省淮安の呉承恩の手になるという誤解に基づき、下江官話 系作品と見なされがちである。しかし、作品の各部は異質な言語をしばしば 含み（拙論1990及び1993）、そこで検出される異質性は《水滸伝》が持つ特 徴（拙論1991）と少なからず異なる。

3)“把”の用法が“替”の用法と交錯する例が白話作品に時として認められる。しかしこの例がそれに相当するかどうかは不明である。

4)拙論1998,p6で“洗浴”を例に考察したことがある。

5)“耽”の「独立した動詞用法」に関しては、可能補語を構成しているもの、 またはそれに準じるものは除外して計数した。なお、“担”の「独立した動 詞用法」について、現代語においては「かつぐ・負う・受け持つ」の意味で しか用いられないことは明白なので、計数しなかった。

6)この現象については、別稿が予定されている。

7)文言の“耽”と口語の“耽”の違いと交錯については、上記の発表予定論文 で触れられる。

参考文献

伊原大策1990 「『正在Ｖ』句型から見た《西遊記》諸本」 『言語文化論集』31

伊原大策1991 「《水滸伝》語彙計量分析試論」 『筑波中国文化論叢』10

伊原大策1993 「《西遊記》諸本の語彙・語法」 『言語文化論集』37

伊原大策1998 「“洗澡”考」 『中国語学』245

4，二つの“耽心”

1．はじめに

明清白話小説に接していると、現代語では極めて使用頻度の高い語でありながら、旧白話の中で出くわすことのない語の存在に気づくことがある。例えば“帮忙”はその例の一つであり、明代白話作品で見かけたためしがない[1]。もちろん、現代語において常用語とされるものはかつても使用頻度が高かったとは限らないのであるから、こうした現象は言語として当然のことではある。

一方、古くから存在する語彙・語法が、旧白話では長い間にわたって姿を現わさないという事実も確認できる。例えば進行を表わす「在＋V」句型は、明代後期の特定の作品に大量に認められるにもかかわらず、その後、民国初期に至るまでほとんど姿を現わさない[2]。方言性や文体の問題、及び資料の質の差違により、こうした現象が現われるものと考えられる。

しかし、かつて存在した語が、久しぶりに出現した時、その姿がかつてのものと大きく異なるとしたら、そこにどのような経緯があったかは、興味の持てる問題となる。

そうした例の一つとして挙げることのできるのが、“耽心”または“担心”である。この語は古くはしばしば“耽心”と表記され、そのため“担心”の本字は“耽心”であると考えられがちである。しかし“耽”が本来の表記であるとすると、明清白話の“耽”の用法と、古くから文言で使用され続けて来た“耽”の用法との間には、大きな矛盾が生じることになる。というのは、例えば《西遊記》に“耽着劳倦”（62回）や“耽病”（69回）などの用例が存在するからである。文言では「楽しみに耽る」はずの“耽”が、白話ではなぜ「疲労に耽り」「病に耽る」のか、これを単に引伸義として理解することは難しい。

形態のみに基づいて判断すれば、“耽心”は極めて古い歴史を有する語である。しかし意外なことに、白話資料に現われるのは明代後期まで待たなくてはならない。しかも明代白話にようやく現われる“耽心”は、文言に見られる“耽心”とは似ても似つかない用法を持つ。となれば、白話の“耽心”と文言の“耽心”との間にいかなる関係が存在したか（あるいは、存在しなかったか）という疑問が生まれる。

そこで小論は、白話で使用される動詞“耽”の歴史を遡ることにより、早期白話に認められる“耽”の特徴的な用法を明らかにし、それによって、白話語彙“耽心”が

明代に至ってようやく出現した背景を考察しようと試みる。

2.1 “耽心”と“担心”

上に述べたように、現代語の“担心”は“明清白話では耽心”とも表記される。同様に“担～”型の形態を持つ類語を見ても、“担忧”は“耽忧”という表記をも合わせ持つ。したがって明清白話においては、ある条件の下で“耽”と“担”は互いに通じ合うと言える。

“耽”と“担”が通じるという現象は、単に表記が一定していなかったというだけの問題では、おそらくない。この両方を使用するにふさわしい事情、あるいはどちらであるかを決定しがたい事情があったためだと推測される。

“耽心”（“担心”）という語が現われ始めた明代後期の白話作品を見ると、“耽心”“耽忧”の表記が“担心”“担忧”を上回る。そこで小論では、“担”と区別する必要がある場合を除いて、表記を“耽”で統一する。但し引用を行なう際は、もちろん原文に従う。

2.2 白話の“耽心”の発生

白話の“耽心”は遅くとも明代後期に既に成立していたが、典型的な下江官話系作品からその用例を見い出すことは難しい。この語の発生については不明な点が多いものの、継承について見れば、非南方系方言と深い関係があると考えられる。代表的な明清白話作品を対象にする限りでは、最も初期の“耽心”は《西遊記》に現われる次の例である。

1,你两个没了行李、马匹耽心，却好生把守洞口。（《西遊記》83）（おまえ　ら二人は心配すべき荷物と馬がなくなったのだから、よくよく洞窟の出口を守っていろ）

管見に及ぶ範囲では、白話の“耽心”は《西遊記》に初めて現われ、《三宝太監西洋記》を経た後、《金瓶梅》そして《醒世姻縁伝》《紅楼夢》へと受け継がれる。

2,三宝老爷一向耽心的是这个软水洋。（《三宝太監西洋記》21）（三宝太監様がずっと心配なさっていたのはこの軟水海です）

3,他店内房屋宽广，下的客商多，放财物不耽心。（《金瓶梅》51）（彼の宿は部屋が広く泊まりの商人も多いので、大切なものを置いても心配はいりません）

4,如今女婿出考，甚是耽心。（《醒世姻縁伝》50）（今、娘婿が受験に出かけるのは誠に心配です）

5,别在外边眠花宿柳。恐怕叫太爷太太耽心。（《紅楼夢》68）（外の花街で泊まることのないようにして下さい。旦那様や奥様が心配なさいますから）

“耽心”は、このように明代後期にいきなり姿を見せ、北方系作品によって清代を経て現代へと継ながる道筋が作られる[3]。

2.3　文言の“耽心”の用法

一方、文言の“耽”について見ると、工具書に頼って検索する限りでは、“耽心”が“担心”と表記される例は見あたらない。そこで“耽”（“担”ではない）について、まず文言の用法を遡る。

6,于嗟女兮，无与士耽。（《詩経》〈衛風〉氓）（ああ女よ、男と遊んではいけない）

毛传：耽，乐也。　（「耽」とは楽しむこと）

7,不知稼穡之艰难，不闻小人之劳，惟耽乐之从。（《書経》〈周書〉无逸）（農作業の苦しみを知らず、一般民の苦労も聞かずに、ひたすら楽しみをほしいままにした）

孔传：过乐谓之耽。（度を過ごして楽しむことを「耽」と言う）

“耽”とは、対象を専一にして楽しむことを指す。そのため“耽心”という語（連語）が構成された場合、特定の対象にこだわることを指す。

8,澄视于秋毫者，不见天文之焕炳，耽心于细务者，不觉儒道之弘远。（《抱朴子》外篇4〈崇教〉）（細い毛に目を凝らす人は日月の輝きを見ることはできないし、心

を小事に込める人は儒道の広大さを理解できない[4])

明代にまで時代を下っても、

9,二乗之士、以寂灭为不死，是故耽心禅观，趋向虚无。（袁宏道《袁宏道集》23〈大宗師〉）（仏教の二乗を修める人は寂滅を不死と見なし、そのために心を禅観に打ち込み、虚無を目指す）

ここで用いられている“耽心”は、現存する《西遊記》の成立年代とほぼ同時代のものであるにもかかわらず、《西遊記》83回（例文1）の用い方とは大きく異なる。

このように、文言の“耽心”の典型的な用法は、心を特定の対象に専らに注ぐことを指す。そこにたとえ目立った快楽を伴うことはないにしても、自発的意志により心を動かすことが共通の要素となっている。まさしく「ふける」ことを指すのである。文言の“耽心”が“担心”の表記を持たないのは、“担”では意味が通らないからであろう。

3.1 白話の“耽”の機能上の特質

文言（古漢語）で“耽心”が使用される以上、白話でも古くからこの語の存在することが期待できるはずである。しかし既に述べたように、明代前期以前の白話資料から“耽心”を探し出すことは容易でない。そこで先ず、白話における“耽”がどのように使用されるかを調査する。

“耽”によって構成される動詞（または連語）を意味に基づいて整理すると、本義「ふける」以外の意味を持つ例として三種に分類できる。すなわち(1)“耽擱”“耽延”“耽误”，(2)“耽待”“耽饶”“耽承”，(3)“耽病”“耽冷”“耽忧”である。第一の分類は「手間どる」の意を表わすもの、第二の分類は「扱う」の意を持つもの、第三の分類は「何らかの影響を受ける」という意を示すものである。これらのうち、(1)は文言の“耽”の引伸義としての範疇にある。特定の対象に「ふける」結果、時間を浪費し「手間どる」からである。(2)のグループの“耽”は時に“担”で表記されることがあり、意味上も“担”に通じると理解することが可能である。(3)の用法

も、“耽”と“担”の二通りの表記を持つが、“耽”あるいは“担”の本義とどのように繋がるのか解しがたい。もし「影響を受ける」ことを一種の負担と考えれば、(3)の用法は(2)の用法の延長線上にあることになる。元代の言語や雑劇を対象とした研究書では“耽”に“承受”の意味の存在を認め、(2)と(3)を同じ用法として扱う[5]。小論で述べようとしている“耽心”の“耽”は、明らかにこれらのうちの第三類に属する。

そこでこの分類に属する語を観察すると、さらに二種に分けられることに気づく。(a)一つは肉体的に影響を受けるものであり、(b)もう一つは精神的に影響を受けるものである。つまり

(a)肉体的に影響を受けるもの

10,自己担疾难去家，或交它借马寻。（《元刊雑劇三十種》〈張鼎智勘摩合羅雑劇〉）（自分が病気になったので、家には行きにくい。彼に馬か驢馬を探させよう）

11,子见湿浸浸血污旧衣裳，多管碜可可身耽新杖疮。（《元刊雑劇三十種》〈張鼎智勘摩合羅雑劇〉）（見ると血みどろになって汚れた服、たぶん痛ましくも体に新しい杖刑の傷ができたのでしょう）

12,你那孤独鳏寡爷担冷，你那老弱残疾娘受饥。（《元刊雑劇三十種》〈薛仁貴衣錦還郷雑劇〉）（あなたの孤独なやもめ暮らしの父は寒いめにあい、あなたの老いて病気の母は飢えている）

(b)精神的に影響を受けるもの

13,你们若要长做夫妻，每日同一处不担惊受怕，我却有一条妙计。（《水滸伝》25）（おまえたちは長く夫婦になり毎日一緒にいてびくびくしたくないのなら、一ついい方法があるのだ）

14,不如紧紧的闭着两只眼，免得心上耽忧。（《三宝太監西洋記》59）（しっかり目を閉じているにこしたことはない、そのほうが恐がらないで済むから）

15,我的姐姐，我为你剐皮割肉，你为我受气耽羞，怎不来看你？（《金瓶梅》86）（お姉さん、私はあなたのために皮を剥がれ肉を削がれ、あなたは私のために虐げられ恥ずかしいめにあっているのだから、私はどうして会いに来ないことがあるでしょうか）

意外なことに、白話の“耽”と結び付く語は“病”“疾”“疮”“冷”“寒”“忧“惊”“羞”“恼”“烦”などであることに気づく。このように明代後期以前の“耽”は、しばしばマイナス面を表現する語と結び付く。この点で、文言の“耽”とは大いに異なる。しかし「快楽にふける」の用法を探し出せないわけではない。例えば、

16,内作色荒，外作禽荒，耽酒嗜音，峻宇雕墻。（《警世通言》19）（内では性欲に溺れ、外では狩りの遊びに夢中になり、酒や音楽の楽しみに耽り、立派な建物で贅沢を極める）

17,因此君臣耽山水之乐，忘社稷之忧。（《喩世明言》22）（そのため山水の楽しみに耽り、国家の大事を忘れる）

18,看他也是好华丽的人，怎不耽风月？（《型世言》11）（あの人はおしゃれな人だから、情事を楽しまないことがあろうか）

19,又没公婆…还有人服事，纤手不动，安耽快活。（《型世言》16）（その上、舅姑はいなくて…世話を焼いてくれる人がいるので、手を動かさずに済み、楽しく暮らせる）

これらの例では“耽”が“酒”“山水之乐”“风月”（もちろん「性的快楽」のことである）“快活”などの語と結び付いている。しかし実はこうした用法を確認できるのは、特定の文体または特定の作品に限られる。

すなわち例文16は、《書経》〈夏書〉〈五子之歌〉の一節であるし[6]、例文17も文言のステレオタイプの表現である。したがってこの両者は、白話文中に引用された文言の“耽”であり、白話の用法と見ることは正しくない。

一方、例文18及び例文19は、いずれも白話文体の中で用いられている。“耽”のこうした用例は《型世言》に特徴的に認められるもので、先行作品から探し出すことは困難である。おそらくこれは、明末になって現われた特殊な現象、または《型世言》特有の現象と考えてよい。

例文10～19を観察すると、“耽”の用法に一つの方向性を見い出すことができる。すなわち、肉体に関わる表現は精神に関わる表現よりも古く、快楽を示す用法は苦悩を示す用法より新しいという点である。

3.2　快楽にふける“耽”と苦痛に悩む“耽”

この傾向を確認するために、《元刊雑劇三十種》（元代作品）と《水滸伝》《西遊記》《金瓶梅》《三宝太監西洋記》（いずれも明代後期作品）、そして《型世言》（明代末期作品）を用いて、表記の違いを区別しながら、“耽（“担”）がどのような語と結び付くかを調査した。以下はそれをまとめたものである[7]。

“耽”（“担”）が伴う賓語(1)（苦痛に悩む“耽”（“担”））

	耽病	担病	耽饥	担饥	耽冷	担冷	耽忧	担忧	計	字数比
元刊雑劇	6	0	1	0	1	1	3	2	14	8.2
明後期作品	2	0	0	0	1	0	5	2	10	0.3
型世言	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0.6

“耽”（“担”）が伴う賓語(2)（快楽にふける“耽”（“担”））

	耽乐	担乐	耽风月	担风月	計	字数比
元刊雑劇	0	0	0	0	0	0
明後期作品	0	0	0	0	0	0
型世言	2	0	4	0	6	1.8

《元刊雑劇三十種》の字数は、《水滸伝》《西遊記》《金瓶梅》《三宝太監西洋記》の総字数の十数分の一に過ぎないという点（《元刊雑劇三十種》は約17万字、《水滸伝》《西遊記》《金瓶梅》《三宝太監西洋記》は310万字、《型世言》は34万字）を考慮しながら、上の表を解釈することにする。

表3.2の(1)を見ると、明代に至って“耽～”の用例が目立って減少していることが知られる。しかもそれらの例は、実はしばしば“耽寒受冷”“受冷耽饥”などのように四字熟語化したものである。この事実は、動詞“耽”が生産性を失い、ステレオタイプ化した慣用句として保存されつつあったことを暗示する。

一方、表(2)では《型世言》にのみ「快楽にふける“耽”」の用例が存在すること

が知られる。表(1)に見られる分布と、表(2)に示される分布は、ほぼ相補関係を構成し、一つの方向を指し示している。そこで、“耽”に関する用法を、語義に基づいてさらにまとめ直すと以下のようになる。

“耽”の語義別分類

	肉体的にマイナスもの	精神的にマイナスのもの	精神的にプラスのもの
元刊雑劇	有	有	無
明後期作品	少	有	無
型世言	極少	極少	有

4.1 “耽”の語義の変化

上の表に“耽”が持つ語義の変化を読み取ることができよう。すなわち、「肉体的苦痛・精神的苦痛を受ける」（元代）→「精神的苦痛を受ける」（明代後期）→「精神的苦痛・精神的快楽を受ける」（明代末期）と変化してきたと言える。このことから、“耽”の本来の語義は、肉体的であれ精神的であれ、苦痛を蒙ることを指すと考えられる。これは重みにも似た苦痛を体もしくは心で受け止めるわけであるから、“担”と表記されることに一定の合理性を持つ。“耽忧”が古くから“担忧”の表記を合わせ持っていた理由はおそらくここにある。したがって“耽心”の“耽”も「耐え難い重荷をになう」という意味に由来するに違いない。

しかし、「肉体的苦痛を受ける」用法が“耽”の古い用法であり、「精神的快楽を受ける」用法が新用法であると認めるなら、《詩経》や《書経》の注が教える“耽”の用法（例文6及び7）との間に大きな矛盾を生じることになる。新しい時代の到来を待ってから、本来古いはずの用法が採用され出したということになるからである。文言と白話との文体の差違の大きさを考慮に入れても、これはいかにも奇妙な現象である。

既に示したように、「心配する」の意を持つ“耽心”は、明代に忽然と白話作品に姿を現わした後、その後は特定の作品群によって伝えられた。この語が南方系作品にも広く用いられるようになるのは、清代末期に至ってのことである[8]。したがって白

話の“耽心”は、初期の段階では明らかに方言性があったと考えられる。もしこの語が文言に基づいて白話文体に採用されたものであるなら、こうした現象は生じないであろう。言うまでもなく明清白話は、一般庶民によって直接作り上げられたものではなく、全国共通の文言の素養を身に付けた文人によって書かれた（または整理された）ものだからである。

こうした事実は、白話“耽心”の由来について、以下の推測を行なうことに合理性を与えるものとなる。白話の“耽”は元来、“dan”という音と特有の意味を持つ俗語であったのではなかろうか。“耽”の表記に揺れが存在するのは、この語が、「耽る」でもなく「担う」でもなく、「苦痛を受ける」という意を表わす語であり、それが伝統的な表記法の中に位置付けられるものでなかったためであろう。“dan”が正式の表記を持たない俗語であったからこそ、元代～明代後期白話の“耽”は文言の例と大きく異なり、「快楽にふける」ことなく「肉体的疾患や精神的苦悩にふける」のである。

この語が明代末期において《型世言》でようやく“耽”本来の文言の用法に接近し、「快楽」を示すようになったのは、俗語の“dan”が“耽”の表記を暫時与えられた結果生じた限定的な変化であったろう。《型世言》では憂いを示す時“担忧”と表記され、“担”が用いられることがあるにもかかわらず、快楽を表わす際はすべて“耽”の表記が採用されるという事実も、この推測を支持する。

明末に至ってこの現象を生ぜしめた要素として、白話の“耽”が既に元代の用法を失いかけていた点を指摘できよう。“耽”が肉体と精神の両方を示す語から、専ら精神活動を示す語へと変化した結果、「精神的にマイナス」と「精神的にプラス」を一つの範疇として捉えることが可能になった。その結果、白話の“耽”は文言の“耽”へと接近し、白話本来の“耽”からいよいよ遠ざかる。

4.2 “耽”の用法における《西遊記》の特異性と“耽心”の語構造

既に述べたように、代表的な明清白話作品において、“耽心”が現われる最初の作品は《西遊記》である。《西遊記》は江蘇省淮安の呉承恩の手になるという誤解に基づき、下江官話系作品と見なされがちである。しかし、作品の各部は異質な言語をし

ばしば含み[9]、《水滸伝》と少なからず異なる。例えば《西遊記》においては、“耽”の用例数が多く且つ種類が豊富である。その例を見ると、

20,行者道：“怕不有十三层哩。”长老耽着劳倦道。（《西遊記》62）（孫悟空が「（この塔は）13層はありますまい」と言うと、三蔵法師は疲れた様子で言った）

21,却説那国王耽病設朝，請唐僧見了。（《西遊記》69）（さて国王は病気にかかったままで政治をとるために出御なさり、三蔵法師とお会いになった）

22,佛母忏悔以后，分付教他拆夙三年，身耽啾疾。（《西遊記》71）（仏母は罪を告げてから彼に三年の夫婦の別離をさせ、体を病気に罹らせた）

23,师徒四众，耽炎受热，正行处，忽见那路傍有两行高柳。（《西遊記》84）（一行四人が暑さに苦しみながら進むちょうどその時、道の脇に高い柳が見えた）

こうした用法は、《水滸伝》の古いとされる部分にも見い出すことができない。これらの例のうち、例文20（“耽着劳倦”）は、“耽寒受冷”など四字熟語化したステレオタイプの例と異なり、“耽”が助詞“着”を従え単独の動詞としての生命を保っている。これは《西遊記》が“耽”の古い用法を忠実に伝えていることを物語る。したがって、《西遊記》に“耽心”の初期の用法を見い出すことができるのは、偶然ではないと言える。“耽心”という語は、動詞“耽”がなお強い造語力を具えていた環境で、「精神的に心に苦悩を感じる」という意味で発生したものであろう。

とすれば、“耽心”の“心”は賓語とは言え、対象賓語ではなく、場所賓語ということになる。元代の“耽”は、人間の生活にとってマイナスの価値を与えられるものに専ら使われる傾向を持つために、「好ましくないもの」という意味は言外に示される。そのため、行為の対象をとりたてて述べる必要がないのであろう。“耽”の本来の用法が保存されていた時代の人々にとっては、“耽”＋“心”だけで「心に苦悩を感じる」という意味が十分に了解されたものと考えられる。

5

以上から次のことが言える。

元代の白話には、“dan”という音を持ち、「肉体的・精神的に不都合を蒙る」という意味の動詞が使用されていた。この語は既に存在した文言の“耽”とは同音もしくは類音で且つ同品詞であったが、引伸義において直接的な繋がりを持つ語ではなか

った。しかもこの語は方言性または口語性の強い語であったために、適切な表記が与えられていなかった。そのため“耽”や“担”という一定しない文字で白話文学作品に書き表わされた。“耽”の字がしばしば用いられながら“担”の表記も採用されたのは、苦痛という重荷を「担う」という点で“担”と通じるためであったろう。

元代の動詞“dan”は、人間の活動上マイナスを示す語と結びつき、“病”“疮”“饥”“冷”“忧”“羞”“寂寞”などの語を賓語として従えたが、まもなく肉体に関する語を避け、専ら精神活動に関する語と結び付くようなった。「心配する」という意味の“耽心”は、こうした環境の下で成立したと推測される。

小論で調査が及んだ資料に基づく限りでは、動詞“耽”が強い生産性を保持していた《元刊雑劇三十種》に“耽心”が見あたらず、明代後期の世徳堂本《西遊記》にこの語が現われる事実は、“耽心”が元代末期～明代前期に誕生した語であることを暗示する。当時の文献に対する精査が進めば、“耽心”が発生した時期と場所について、より詳しい情報を得ることができるであろう。

やがて明代末期に至ると、“耽”は《型世言》の中で快楽を示す語と結び付く例を出現させた。例えば“耽风流”“耽快活”がその例である。しかしこれは文言の“耽”の影響がたまたま白話作品に現われたものと考えられ、その影響力は限定的であった。

“耽心”は明代後期以前に発生した後、明代後期から清代にかけて継承される過程において、明らかに特定の方言に偏る傾向を示した。最初期の例が《西遊記》及び《三宝太監西洋記》に認められるものの、“耽心”を受け継ぎ現代漢語へと伝えたのは、《金瓶梅》《醒世姻縁伝》《紅楼夢》などの北方系作品であった。“耽心”が全国に普及し、現代語が持つ文法機能を具えるに至るには、この後なお長い年月が必要となる[10]。

“耽心”が「心を耽らせる」ために「心配する」の意味を持つと考えるのは、“耽”の本来の用法に注目せず、その字面に惑わされた結果であろう。たとえ両者が引伸義において繋がるとしても、その間には大きな懸隔が存在する。白話の“耽心”と文言の“耽心”は、「他人のそら似」に過ぎないと考えられる。

注

1)“帮忙”の発生及び変遷については拙論で考察したことがある。拙論1998。

2)進行を表わす「在＋V」は現代に至って発生したものと従来考えられてきた　が、実は明代の《三宝太監西洋記》に多くの「在＋V」や「在＋V着」を認　めることができる。拙論1991。

3)“耽心”が現代漢語へと繋がる変遷過程については、拙論1999。

4)“耽心于细务者”の部分について、テキストにより異同がある。ここでは　《百子全書》本に拠った。《四部叢刊》本は“耽”を“肆”に作る。

5)例えば李・黄・邵1998、p68。また李申1981も、“耽不住”“耽烦恼”“耽　惊”などを例に挙げてそれらが“承受”の義を持つものと見なしている。し　かしこられの先行研究は、小論で言う(3)の用法の特殊性に気づいていない。

6)兼善堂本《警世通言》に引用されるこの句は“耽酒”となっているが、《四　部叢刊》本《書経》は、“耽”を“甘”に作る。

7)《元刊雑劇三十種》で判読困難な部分は、寧希元1988に拠った。例えば〈諸　宮調風月紫雲亭雑劇〉では“忍冷耽□”とあり、□の部分は食偏がかろうじ　て読み取れる。これを“飢”と見なした。しかし一部で該書に従わない部分　もある。例えば〈薛仁貴衣錦還郷雑劇〉では“檐冷”とあるが、該書はこれ　をなぜか“耽冷”と読み代えている。小論は木偏を手偏の誤りと見なし、“　担冷”と解した。なお、計数を行なう際、類似の語を一つにまとめて扱った。　例えば、“耽疾”には“耽疾”の他に、“耽啾疾”“耽疾患”“耽患”“耽　疮”を含ませた（肉体的疾患の類）。同様に、“耽饥”には“耽饿”（飢餓　感の類）を、“耽冷”には“耽寒”“耽炎”（寒熱の類）を、“耽忧”には　“耽惊”“耽恼”“耽烦”“耽羞”“耽寂寞”“耽寂怨”（精神的悩みの類）　を、“耽乐”には“耽快活”を、“耽风月”には“耽风流”を、それぞれ含　む。なお、表中の「字数比」とは、単位字数あたりの用例数の比率をおおま　かに示したものである（用例数／総字数×100,000）。

8)拙論1990及び1993。

9)《西遊記》の言語については拙論で触れたことがある。拙論1990及び1993。

10)現代語の“担心”は、旧白話の“耽心”と表記が異なるのみではない。文法的機　能においても大きく異なる。拙論1999。

参考文献

伊原大策1990　〈“正在V”句型から見た《西遊記》諸本〉　《言語文化論集》31

伊原大策1991　〈明代白話作品に見られる“在V”〉　《中国文化》49

伊原大策1993　〈《西遊記》諸本の語彙・語法〉　《言語文化論集》37

伊原大策1998　〈“帮忙你”は誤りか？〉　《言語文化論集》48

伊原大策1999　〈“担心”が賓語をとるに至るまで〉　《筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書平成10年度》II

寧希元1988　《元刊雑劇三十種新校》　蘭州大学出版社

李申1981　〈釈元曲“撮哺”和“耽”両詞〉　《中国語文通訊》3（《元明戯曲語釈拾遺》中国俗文学研究会1983所収）

李崇興・黄樹先・邵則遂1998　《元語言詞典》上海教育出版社

5,『小心』に見られる原因賓語生成の一類型（概要）

1　「小心＋N」の問題点

「小心」は動賓構造動詞でありながらさらに賓語を従えるという点で、「得罪」と共通性を備えるが、両者の間には極めて大きな違いがある。それは、「小心」の賓語は「ウケテ」を示すのではなく、原因を示すという点である。例えば、

1,小心路滑。（「注意する」＋「道が滑る」）

——→因為路滑，所以要小心。（道が滑る〔と困る〕ので注意して下さい＝滑らないように注意して下さい）

したがって、「小心」は、賓語を従えるはずのない動詞が賓語を伴うという点、及びその賓語が受事賓語（対象賓語）ではなく原因賓語であるという点が特異である。

そこで「小心」を例にとり、以下に原因賓語生成の一類型を探る。

2　近世白話の「小心」

明代における「小心」は賓語を従えることがなかった。そのため動詞句を賓語とする「小心＋Vp」は存在せず、名詞を賓語とする「小心＋N」も存在しなかった。たとえ見かけ上「小心＋Vp」に相当するものであっても、それは「小心」とVpが連動式を構成しているものであり、後置される動詞句が賓語として機能しているわけではなかった。同様に、「小心＋N」も、「火の用心」を訴える慣用句の中でのみ「火燭」が見かけの賓語であるかの如く使用された。ただ注目すべきことに、「小心火燭」は「動詞＋賓語」構造を構成していないとは言え、しばしば「戸締まり用心」を示す慣用句（「謹防盗賊」「緊閉門戸」「緊防門戸」「拴好門戸」など）と対句を構成して用いられるという特性があったため、「戸締まり用心」の内部構造の類推を受け、動賓構造に変質する可能性を秘めていた。

やがて、清代中期の《岐路灯》には「小心厨房的火」「小心門戸」などの用例を見い出すことができるようになり、さらに清末の《児女英雄伝》には「小心当場出丑」という用例が出現し、ここに原因賓語が出現する。したがって、原因賓語成立として、以下の各過程を想定できる。

［明代］

「小心火燭」…「小心」の後置成分として「火燭」のみが許される。

これは慣用句（標語「火の用心」）にふさわしい縮約によって成立した形態だが、「緊閉門戸，小心火燭」の対句の一方の成分として常用されるため、「緊閉門戸」が内包する動賓構造の影響を受け、「火燭」は見かけ上の賓語に変質する可能性を秘める。

「小心」は賓語を伴うことができない

［清代中期］

「小心厨房的火」
「小心門戸」 …「小心」の後置成分として「火」や「門戸」が選ばれる。

「緊閉門戸」との交錯とそれに基づく類推により、「小心門戸」に動賓構造が適用され、賓語相当語に一定の自由度が生まれる。しかし「緊閉門戸，小心火燭」という慣用句（「戸締まり用心、火の用心」）の連想の範囲内にとどまるため、賓語相当語は「火」や「門戸」が選ばれる。

「小心」が名詞性賓語を伴う萌芽的形態の誕生

「小心東西」…「火」「門戸」以外の名詞が動詞の後置成分として使用される。

「小心厨房的火」や「小心門戸」を経由して「小心」の後置成分に自由度が高まり、「小心東西」が生成される。

清代後期は自動詞が他動詞化を求め始める時代であったことも、この用法の発生を促した。

「小心」が名詞性賓語を伴う原因賓語の初期的形態の誕生

［清代後期または清代末期］

「小心＋Vp」…「小心＋N」に引きずられ、「小心」が文賓語をも従えるようになる。

文を賓語とする原因賓語の誕生

3　原因賓語「小心＋N」の成立過程

以上に見たように、「小心」が賓語を従える原型は、明代でしばしば用いられた慣用句「小心火燭」（火の用心）に求めることができる。この句は、「悪い事態を発生せしむ可能性のある火の元が、危険な状態にならないように注意する」という意味で使用された。そのため、「小心」が、賓語を従える他動詞としての用法を獲得した後も、悪い事態を発生せしむ原因となる語を賓語として採用することが求められる。「小心」が原因賓語を伴う機能は、こうした背景のもとで成立したと考えられる。

6,『V見』型動詞の語構造について

1 「夢見」の語構造について

1.1 “梦见”の問題点

現代漢語の用法に関する的確な説明で評価の高い呂叔湘《現代漢語八百詞》p.262は、“见”について“作动结式第二成分，表示感觉到。多和视觉、听觉、嗅觉等有关”（「動詞＋結果補語構造」の第二成分となり、知覚の認識を示す。多くは視覚・聴覚・嗅覚に関連する）と述べた上で、視覚や聴覚の動詞と共に“梦见”を例示する。ここで“梦见”が“看见”“听见”などと並んで記述されていることから、現代漢語において、“梦见”が所謂「知覚を示す『V见』」と同質の補語構造を持つものとして認識されていることは明らかである。動詞“梦”が大脳の機能に基づく生理現象であるからには、それを“看”や“听”などの知覚動詞の延長線上に位置付けることができるというわけであろう。

しかし古典に関するささやかな読書経験を持つ外国人なら、“梦见”を“看见”と同列に論じることに、直ちに違和感を覚えるはずである。《論語》の有名な一節に、

1,甚矣吾衰也，久矣吾不复梦见周公也。（《論語》〈述而〉）（甚だしいかな吾が衰えたるや、久しいかな吾また夢に周公を見ず）

とあるからである。「夢に～を見る」という訓読が原文の構造を正しく反映しているかどうか別にしても、この“梦见”を結果補語構造と見なしてよいのであろうか。もし上古漢語の“梦见”が現代漢語の“梦见”と同一語であるなら、古色蒼然としているはずの古語の語感を、この語が如何なる過程で消し去って現代語へと姿を変えたのか、興味の持たれる問題となる。

また、もし別物であるとするなら、同形同義の二語が如何なる関係を持つのか、その両者の交錯の中で、《論語》〈述而〉篇の“梦见”がどのような役割を与えられつつ、現代漢語の“梦见”が生み出されたのかが問われることとなる。

“梦见”において、“见”はどのような機能を担っているのであろうか。小論は、この問題について、語法史研究の観点から“梦见”の語構造の変遷過程を探り、現代漢語“梦见”が結果補語構造であると「錯覚」されるに至った背景を明らかにする。同時に、文言が白話に生き残る際に採用されるある種の典型的パターンを見い出すこ

とも目的の一つとする。

2.1 上古漢語の“梦见”

“梦见”の古い用法は《論語》〈述而〉篇に限られるわけではない。他にも多くの用例を容易に探し出すことができる。

2,昔者寡人梦见良人。（《荘子》〈外篇〉〈田子方〉）（過日、私は夢に賢者を見た）

3,今寡人梦见一丈夫、延颈而长头，衣玄绣之衣而乘辎车。（《史記》〈亀策列伝〉）（今、私は夢で一人の男を見た。首が伸びて頭も長く、黒い刺繍のある服を着て幌のある車に乗っていた）

4,王梦见一儿，眉间广尺言欲报仇。（《搜神記》11）（王は夢で一人の子供を見たが、その子供は眉間が一尺もあり、〔王に〕仇討ちをするぞと言った）

5,小时，坐睡，即梦见十娘。（《遊仙窟》）（暫くしてから、居眠りすると、夢で十娘を見た）

6,当晚夜至三更，夫人睡得正浓，梦见一道人。（《封神演義》12）（その夜、真夜中になって夫人が熟睡していると、夢で一人の道人を見た）

このように、“梦见”は上古漢語から中古漢語、そして近世漢語へと極めて長期にわたり継続して多くの文献に現われる。“梦见”は、盛衰の激しい中古漢語期を生き抜いて、近世漢語から現代漢語へとその命を繋いだ寿命の長い古語である。

さて、上古漢語には“梦见”の他に、「V见」型複合語として“望见”“窥见”“观见”を見い出すことができる。例えば、

7,路中大夫既许之，至城下，望见齐王，曰。”（《史記》〈斉悼恵王世家〉）（路中大夫は〔斉王に虚偽の報告をすることを〕承諾し、斉の城下に着くと斉王を遠くに見て言った）

8,窥見兮溪涧，流水兮沄沄。（王逸《九思》〈哀歳〉）（谷川を覗けば、水が波立ちながら流れている）

9,吾欲观见之。（《韓非子》〈外儲説左上〉）（私は〔その道具を〕詳しく見てみたい）

これらは、“望”“窺”“观”など「見る」を意味する動詞が“见”と結び付いた例である。この“见”が知覚の認識を示す機能を持つものだとすれば、上古漢語に既に結果補語構造が成立していたと観察できそうではある。

しかし結果補語構造とは、複合語の第一成分によって示される動作が行なわれた結果、複合語の第二成分によって示される状態が発生したことを示すものである。したがって上記例文に見られる「V见」において、“见”が自動詞として機能しているのであれば結果補語構造であると見なされるが、他動詞として機能しているのであれば、同義複合構造として扱われなければならない。

梅祖麟1991、pp.122-125は、漢代の複合語に結果補語構造を持つものが存在したことを容易に承認しない。上古漢語にあっては、現代漢語の自動詞がしばしば他動詞として使用される事実が存在するからである。

志村1984、p.248も、現代漢語で結果補語構造と見なすことができるものでも、六朝初期において“AB”型と“BA”型が同時に存在した事実（例えば“烂壊”と“壊烂”、“灭尽”と“尽灭”）を見い出し、こうした例の語は等立的連用によって成立しているものと見なす。

そのため、結果補語構造であることの第一条件を、梅祖麟1991、p.120が定義する“前一个成份是他动词，后一个成份是自动词或形容词”（第一成分が他動詞で、第二成分が自動詞または形容詞）とするのであれば、結果補語構造の一般的成立時期を先秦時代または漢代にまで遡ることは難しい。

2.2　上古漢語の“梦”

したがって、先秦時代に存在する「V见」型動詞（または連語）の構造を検討するにあたっては、現代漢語の用法に対する見解を単純に持ち込むことに慎重であらねばならない[1]。

結果補語の発展過程に関するこうした知見を踏まえて観察すると、“梦见”には“

望见”“窥见”“观见”と異なる特徴の存在することが明瞭となる。

すなわち、《説文》に拠れば、

10,望，出亡在外，望其还也。（《説文》12下）（「『望』は遠くへ逃げて、帰るのをのぞむこと」）

11,窥，小视也。（《説文》7下）（『窺』は密かに見ること）

12,观，谛视也。（《説文》8下）（『観』は詳しく見ること）

と説明される。加藤1970、p.131は“望”についてさらに《説文》に訂正を加え、「遠望」の本字の仮借とする。

しかし一方、“梦”は“瘳”を本字として、

13,瘳，寐而觉者也。（《説文》7下）（『夢』は寝ていながら意識があること）

と述べられる。そのため、夢で幻影を『見る』ことはあっても、この語の本来の機能を、“望”“窥”“观”などの視覚動詞と同一のものと見なすことは適切でない。

2.3 上古漢語の“梦见”の語構造

そこで“梦见”の語構造を知るため、「V见」型動詞（または連語）について検討すると、「視覚動詞＋见」の他に、「視覚に関連する語＋见」が存在することに気づく。例えば、

14,寡人尝闻道而未得目见之也。（《韓非子》〈十過〉）（私は「道」という言葉を聞いたことがあるが、目でそれを見たことがない）

15,聪者耳闻，明者目见。（《説苑》〈雑言〉）[2]（耳の優れた人は耳で聞き、目の優れた人は目で見る）

これらの例では、“目见”が「目で見る」の意で使用されている。したがって、ここでは“目”が“见”を修飾する構造になっていることが知られる。

この“目见”が一語としての内部結合力を備えているかどうかは、今の場合、問題とならない。ここでは、“目见”が「修飾語＋被修飾語」の関係、すなわち偏正構造

に相当する関係を持つ点を確認できればよい。

ところで、容易に観察できるように、上古漢語の“梦”には名詞用法と動詞用法がある。例えば、

名詞用法：

16,梦之中又占其梦焉。（《荘子》〈内篇〉〈斉物論〉）（夢の中でその夢を占う）

17,臣之梦践矣。（《韓非子》〈内儲説上〉〈七術〉）（私の夢は、しるしがありました〔正夢でした〕）

動詞用法：

18,古之真人其寝不梦。（《荘子》〈内篇〉〈大宗師〉）（昔の真人は寝ている時でも夢を見ない）

19,故将见人主而梦日也。（《韓非子》〈難四〉）（だから君主に会おうとすると、太陽を夢に見るのです）[3]

さらに“梦”は後置される動詞と結びつき、偏正構造を構成することができる。例えば、

20,梦饮酒者，旦而哭泣。（《荘子》〈内篇〉〈斉物論〉）（夢で〔楽しく〕酒を飲んだものも、朝には〔そのことを忘れて〕泣くことがある）

21,未尝不独寝，恐梦言而使人知其谋也。（《韓非子》〈外儲説右上〉（必ず一人で寝るのは、寝言を言って自分の計画を人に知られるのを恐れるからだ）

22,夙夜梦想，五谷丰孰，百姓家给，比皇帝加元服，委政而授焉。（《漢書》〈王莽伝〉）（五穀が豊かに実り、庶民には家ごとにゆきわたり、皇帝が元服するころに、政治を任せたいと、朝も夜も夢に思っている）

ここに見られる“梦饮”“梦言”“梦想”は、いずれも「修飾語＋被修飾語」の構造により成立している。これは、偏正構造であるという点で“目见”が持つ内部構造と同じである。

以上の事実から、後置される動詞に対する修飾機能を“梦”が持ち得ること、及び前置される修飾語の修飾を“见”が受け得ること、の二点を確認できる。したがって、上古漢語において補語構造の成立を確認できないとすれば、“梦见”の構造を「修飾

語＋非修飾語」（「夢で見る」）の偏正構造と見なすのが合理的である。

何楽士1992、p.123は、元時代の言語についての考察に際して、“动补的结合情况也更接近现代汉语”（「動詞＋補語構造」の用法も一段と現代漢語に近くなった）事実を裏づける例として、《竇娥冤》の“梦见端云孩儿”を挙げる。氏は「V见」型動詞の歴史と内部構造を吟味することなく、形態のみに頼りつつ、それを現代漢語と同質のものと見なしている。しかし既に示したように、「梦见＋O（賓語）」という句型が古い時代より存在するからには、この例をもって“更接近现代汉语”（一段と現代漢語に近くなった）と見ることはできない。元曲の“梦见”と同機能を持つ同形態の語は、上古漢語以来、綿々と継承されているのである。

3.1　近世漢語の“梦见”の語構造

さて、現代漢語では、“梦见”と同義の表現として“梦到”が存在する。例えば“我昨晚梦到了你”（私は昨晩あなたを夢に見ました）[4]という表現が時として用いられる。呂叔湘1980、p.127は動詞に後置される補語の“到”が受事目的語を従える時、“表示动作达到目的或有了结果”（動作の目的が達成されること、または結果が生じることを示す）と述べる。現代漢語の“梦到”の“到”は、とりもなおさず「目的の達成」または「結果の発生」を示すものである。したがって“梦到”は「～を夢見る」の意を表わすことになる。

そこで近世漢語以前に見られる“梦到”の用例を観察すると、興味深い事実を見い出すことができる。

23,木又于夜中卧而诵习，梦到西方。（《冥祥記》〈宋尼慧木〉）（木がまた夜中に横たわってお経の練習をしていると、夢で西方浄土へ行った）

24,物在人何在？空劳魂梦到阳台。（《金瓶梅》43）（〔関係ない〕物はあるけれど、〔好きな〕人はどこにいるのか。空しく魂が夢で陽台〔の男女の世界〕に行くだけだ）

25,后因烂去阳物，又梦到阴司，道我应为女，该与吕达为夫妇。（《型世言》37）（〔悪い病気で〕男根が腐ってなくなってしまい、夢で地獄へ行ったところ、私は女

であるはずなので呂達さんと夫婦になるべきだと言われた）

26,次日，罗慧生打点得念头端正，到晚间上床，果然又梦到女子之处。（《西湖二集》21）（翌日、羅慧生は気持ちを整えて夜に就寝すると、果たせるかな、夢でその女性のもとへ行った）

上記の“梦到”は、「目的の達成」または「結果の発生」を示す補語構造を構成しているかに見える。しかし仔細に観察すれば容易に気づくように、これらの例の“梦到”には常に場所詞が後置される。この事実は、賓語として、“梦”が場所詞を従えているのではなく、“到”が場所詞を要求していることを示唆する。そのため“梦到”は、「～を夢見る」ではなく、「夢で～に到る」という構造を持つのではないかと疑うに足る。この推測は、次の用例が存在することによっても確認される。

27,这日到书馆中伏枕而卧，一念不舍，遂梦至方氏门首。（《西湖二集》21）（この日は書斎に行って枕に伏して寝ながら〔その女性のことを〕いちずに思うと、夢で方氏の家の入り口に行った）

28,因病蛀梗，晕去，梦至阴司，道小人原该女身，该配吕达。（《型世言》37）（〔私は〕病気で男根が腐ってしまい、気絶して夢で地獄に行くと、おまえはもともと女であるから呂達さんと夫婦になるべきだと言われた）

このように、“梦至”の後には当然ながら場所詞が後置され、「夢で～に至る」の意が表わされる。語義に移動性を含まない“梦”が、空間的到達点を示す“至”と連用されても、それを補語構造と見なすことはできない。“梦至”は“梦饮”“梦言”“梦想”と同一の構造を持つと認定されるべきであり、偏正構造を構成していると考えられる。

例文28の“梦至”は例文25の“梦到”の言い替えであり、例文27は例文26と同内容のことを述べていることからも知ることができるように、“梦到”と“梦至”との間に機能上の差違は存在しない。したがって明代以前の白話の“梦到”は“梦至”と同様に、結果補語構造ではなく偏正構造を構成していると見ることができる。この見解は、上古漢語～近世漢語の「梦Ｖ」が偏正構造を持つという観察と一致し、合理性を失わない。

3.2　“梦见”の語構造の変質

しかし“梦”が明代までに補語構造を作り得なかったかと言えば、そうでもない。例えば、明代白話に程度補語構造を認めることができる。

29,咱想起来这个梦，梦得有些不吉。（《三宝太監西洋記》93）（この夢を思い出してみると、些か不吉な夢の見方であった）

また、“梦”は可能補語をも構成する。

30,我说与你罢。你做梦也梦不着。（《金瓶梅》67）（おまえに教えてやろう。おまえは決して夢でも見ることはできないよ）

こうして、明代において“梦”が補語構造を構成できるようになった環境の中で、ついに“梦见”も姿を変えることになる。

31,包内之物，你们梦也梦不见。（《済顛語録》）[5]（包みの中の物は、おまえらは夢でも見ることができないよ）

ここで可能補語“梦不见”が成立している以上、“梦见”はもはや偏正構造ではあり得ない。“梦见”の“见”が、“梦”に対する補語として機能していると見なければならないからである。これ以後のすべての“梦见”が補語構造を持つものであることを直接に確認し難いにしても、“梦见”が偏正構造から補語構造へと転化する契機を、ここに確認することができる。この“梦见”は上古漢語の“梦见”と同形同義でありながら、内部構造は明らかに異なり、現代漢語の“梦见”の初期の例と見なすことができるものである。

“梦见”が偏正構造から補語構造へと変化する際、“看见”を始めとする「V见」型補語構造がその背景に存在したことが考えられる。“看见”“听见”が多用される環境にあって、それと類似の“梦见”という形態において使用される“梦”は、“看”“听”などの知覚動詞の仲間へと引き込まれることとなったと推測できる。その変質の過程においては、“梦”が睡眠中に働かす視覚機能を示す動詞である点も、効果的に機能したことであろう。とすれば、現代漢語“梦见”は、白話の“看见”が文言

の“梦见”に機能した類推作用の中で成立したものと言える。

4.1 まとめ

現代漢語の“梦见”は、こうして“看见”と同じ内部構造を持つ語へと変化するに至った。以上をまとめると次のようになる。

上古漢語の“梦见”は偏正構造を持つ連語（または語）であり、現代漢語の“梦见”は補語構造によって構成される複合語である。したがって“吾不复梦见周公”（《論語》〈述而〉）の“梦见”は、現代漢語で常用される“梦见”とは、同形同義でありながら、内部構造が異なると見なければならない。

一般に、上古漢語の語が現代漢語に残存した場合、いかにも古色蒼然としたものが少なくない。ところが、言語に関心を持つネィティブに“梦见”の文言性を尋ねると、彼らはしばしば“梦见”を口語語彙に属するものと答える。彼らの語感では、これが文言由来の語との印象は薄い。

これは、“梦见”が本来は偏正構造を持つにもかかわらず、近世漢語期において「Ｖ见」型動詞の隆盛の中で自らの変身を遂げたためである。本来は「見る」という意味の動詞“见”を、知覚の認識を示す補語にすり替えるという操作を行なうことで、形態を変えずに語構造のみを大きく変質させた。この結果、構成要素のそれぞれを単独で見た場合、“梦”（単独使用する動詞としての“梦”）も“见”（「見る」という意味を示す動詞としての“见”）も共に文言性を帯びる動詞でありながら、両者を組み合わせることで、かえって「知覚動詞＋結果補語」という口語句型を獲得することができた。かくて古語の“梦见”は、新興の補語構造「Ｖ见」の形態を偽装することで、現代漢語へとその生命を繋ぎ、見事に再生を果たした。

上古漢語に起源を持つ“梦见”が、現代漢語において口語語彙として「錯覚」されるのは、こうした背景が存在するからである。

ところで、Yuan Ren Chao（趙元任）1968、p.448は、「Ｖ见」が知覚を示す文法機能を持つものと認定した上で、“梦见”の語義について不自然な解釈を繰り返す。すなわち、“a dream is supposed to occur to the dreamer without his conscious volition.”（「夢」は意識的な意志の働きなしで引き起こされるもの〔だから

“看见”と“梦见”は同じ文法構造を持つの〕である）と述べた後に、さらに懇切丁寧にも注を加え、心理学的に観察できる夢の非意志性について長々と述べる。氏はどうやら“梦见”の異質性におぼろげながら気づきつつあるものと見える。氏が“梦”について念入りな説明を縷述するのは、「Ｖ见」の文法機能の統一性を確保するための合理化であろう。

しかし、小論で明らかにしたように、“梦见”は本来は偏正構造を持つ文言であり、後世の口語に偶然にも「Ｖ见」型補語構造が発生したため、“看见”の類型に合流したに過ぎない。したがって、“梦”の持つ視覚性が“梦见”の語構造の変質の際に効果的に機能したとは言え、“梦”に非意志的な知覚動詞としての特性を求めるのは、ないものねだりに等しい。

歴史的に複雑な背景を持つ文法構造を分析するにあたり、単に現代語のみを対象にその機能を抽出しようとすると、実り少ないのみでなく、牽強付会すら招くことがある。

上古漢語の“梦见”が現代漢語に生き残るために採用した偽装は、高名な文法学者をもやすやすと騙すことが可能な程に巧みであった。

〔注〕

１）上古漢語～近世漢語における「Ｖ见」型補語構造の発生と変遷に関しては、別稿で詳しく検討される。拙論〈結果補語構造「Ｖ見」の発生とその変遷〉参照（発表予定）。

２）《韓詩外伝》1にも類似の表現があるが、そこでは“耳闻”“目见”をそれぞれ“自闻”“自见”に作る。

３）同様の内容が《韓非子》〈内儲説上〉〈七術〉にもあり、そこでは“梦日”ではなく“梦见日”となっている。しかし《韓非子》〈雑篇〉〈難四〉には、“梦日”の他に“梦灶”（竈を夢に見る）という用法もあり、陳啓天1969に拠れば、“梦日”“梦灶”について、諸本の間に異同もない。したがって、“梦日”“梦灶”という用例がかつて存在したことに疑いを持つべき理由はない。

４）この表現には方言性がある。この問題は別稿で触れられる予定である。

５）類似表現が同箇所にさらに1例ある。

〔参考文献〕

加藤常賢1970　《漢字の起源》　角川書店

何楽士1992　〈元雑劇語法特点研究〉《宋元明漢語研究》所収　山東教育出版社

志村良治1984　〈使成複合動詞の成立過程〉《中国中世語法史研究》　三冬社

陳啓天1969　《増訂韓非子校釈》　台湾商務印書館

梅祖麟1991　〈従漢代的“動、殺”、“動、死”来看動補結構的発展〉《語言学論叢》16　北京大学

呂叔湘1980　《現代漢語八百詞》　商務印書館

Yuan Ren Chao 1968 (趙元任)　A Grammar of Spoken Chinese, University of California Press,Ltd.

「看見」の語構造の歴史的変遷（要旨）

1　「看見」の歴史的変遷の概要

「看見」は本来、同義複合構造を持つ動詞と見るべきであるが、極めて早い時期に結果補語に準じる構造へと変質の兆しを見せ、六朝期以降における「Ｖ見」型結果補語構造の先駆となったと考えられる。

詳しくは、再検討を重ねた上で、別の場で発表される予定である。（発表予定論文「結果補語構造『Ｖ見』の発生とその変遷」）

（終）